白きを云々―能の次第に似せて筆を起す、下繪の後に彩色する意(論語)
北野―來たに掛く
丹青―繪畫
きせる―被せる
と燈管
腰―越にかく
鬱山―春なれば雪解け緣にかへると掛く
篠杓子―手に持てば疱瘡輕くなると云ふ名物
あつき―厚きと
熱き
敦賀―鉉に掛く

傾城反魂香

上之卷

作者　近松門左衞門

白きを後と花の雪〳〵、野山や春を畫くらん。聞に北野の時鳥、初音を啼し其昔、清涼殿に立られし、跳馬の障子の繪、夜毎に出て萩の戸の、萩を喰しも金岡が、筆のすさみの跡たへず、傳はる家や畫工の名譽、狩野四郎二郎元信、丹青の器量古今に長じ、心ばへ能男ぶり、親の繪筆の彩色に、生れつきなる美男なり。比は文龜の彌生の空、天滿天神の告有て、越前の國氣比の浦へと旅羽織、我は笠著て大小の、柄にも袋きせる筒、丁稚がこしの白山も、去年の緣にかへる山。山のいたゞき青々と、雲に映ふ月代の、湯尾峠の孫ぢやくし、盛こぼしたる花重、かさね〳〵し旅籠屋が、情もあつき爛鍋の、敦賀の濱にぞ著給ふ。四郎二郎一僕を招き、「ヤイ雅樂の介、外の弟子にも隱し、此所に下りしこと餘の義にあらず、近江ノ國の大名、六角左京ノ大夫賴賢殿と申は、佐々木源氏の族頭高

跡なく云々―武隈の松は此度跡もなし千歳をへてや我は來にけん（能因法師）

所の者の云々―此邊能のワキ詞にてうつす、以下皆其言葉遣

實盛―越前生れにて白髪を染め戰死せしより云ふ

しは越の松―坂井郡濱阪村にあり、よもすがら嵐に波を運ばせて月を垂れたる汐越の松（西行）

あそふ―鯖江の北の淺生津か松若は蛮人の名

島の舘とて、系圖所領竝びなき大將成が、將軍家の御意を受、本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奥州武隈の松と云名木は、往古能因法師さへ、跡なくなりしと讀たれば名のみ殘つて知る人なし。我是を書顯はし、譽を得させ給はれ、と天滿天神を祈りし所に、武隈の松を見んと思はゞ、越前國氣比の濱邊に行べし、とあらたに靈夢を蒙れども、それは陸奥爰は越路、何を知邊に尋ぬべき。哀れ里人の來れかし、物問ん」とぞ呼るゝ。里人「所の者の御用とは、都人にて有けに候。御尋有たきとは何事にてばし御座候」元「御覽の如く都の者、天神の教に依て松を尋る子細有。此所にこそ名高き松の候らめ。教へて給はり候へとよ」里人「是は思ひも寄らぬことを承る物かな。此北國にてお尋有ふならば、越前布越前綿、若は實盛の生國なれば、お供の奴の髭にぬる、油墨などのお尋も有べきに、名高い松とは流石優しき都人。先當國の名木は、西行が鹽こしの松、あそふの松若が物見の松、金が崎には義貞の腰掛松、山のを山松庭のを庭松、門には門松酒には濱松、肥たは肥松、捻たは捻松、わり松たい松ぬつぼり松、我らが息子に岩松長松と申綠子も有、庄屋の名は松兵衞、若い時には相撲取、赤松ぶちわつた樣に御座有しが、今老松になられて、力も元より下り松、腰も屈んで、ゐざり松〳〵と所の人は呼候。ヤア誠

酒には云々―潰松のざざんざと離す故

名高き松―此松は六本ぢの松

まぶこそ云々―情夫に逢ふ事もさしひきあり

米―妓にかく、水損なしはいつも全盛を云ふぬめり―しなりと出た

はまつた―歎かれた

こなさあ―こなさん

に天神の御告と有に思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。是ぞ京にも類なしと、心を懸ぬ人もなき、色よき松の候が、若左樣の松にては御座なく候か」元「實や往來も慕ふとは疑ひもなく、我らが尋る名木よ。急いで見せて給はれかし」里人「いつも夕暮毎には此所へ現はれ出給ひ候。ヤア〳〵はや那へ御出候。我らはお暇給はり候べし。御逗留の間御用の事は承り候べし」元「賴み申候はん」里人「心へ申て候」高き名の松の門立たちなれて、人待ち顏の暮ならん。町は敦賀のかけ作り、まぶこそ汐のみちひなれ。誰をかも知る人にせん此廓の、松と成しも親の爲、賣られ買はれて北國の、土氣の曉の里なれど、米の育ちは上田の、水損なしの大夫職、名を遠山と呼ばれしも、人に登れの戀の坂、おろし歩みの道中は、花の立木の其儘に、ぬめり出たる如くなり。雅樂の介、「是申見事な者が夫そこへ。夫々」といへば、四郎二郎「ヤアなんと、松が見へたか現れたか。寫しとめん」とふつと立ち、女郎にはたと行當り 元「是は扨、松かと思ふてはまつた。眞の松を尋て見ん。丁稚こい」と行違ふ、袖を控へて、大夫「是申此遠國の我々と、京の廓の松樣達と、比べさんすが不覺の至り。併不粹なお方には、松と見られて嬉しうなし。杉と云はれて腹立ず。桑の木とも榎とも、こなさあに似合ふたあほふの木共見さんせ」と、

無駄言なしの云ひ捨は、田舍米とて笑はれず。元「ヲヽ御機嫌そこねし御尤。實々松とは大夫さま。我等はわるふ心へて、不調法な御挨拶、眞平々々お詫こと。是を御緣にお知人に成ましたし。下拙ことは、狩野ノ四郎二郎元信と申わづかの繪書。去御力より武隈の松の圖を仕れとの仰、則天滿天神の夢想に任せ、此所にて名有松と尋しを、大夫さまとの取ちがへ、是はかふも有ふこと。御了簡ついでにお交際もあまた也。願のかなふ便もあらば、御世話頼み奉る」と、思ひ入てぞ語らるゝ。女郎はつと顏を詠め、扨は狩野ノ四郎二郎元信樣とは御身の上か。耻をつゝむも時による。何を隱さんわしことは、土佐ノ將監光信が娘なるが、父は一とせ勅勘うけ　今浪人の憂渡世、此身に沈むは申さず共、推して泣ひて下さんせ。扨武隈の松の圖は、土佐の家の祕傳の繪本、漏すことは叶はね共、夕不思議や天神樣の夢の告、狩野と云ふ繪師下るべし。武隈の松を傳受せよ。父が出世の種ならん、と見たはまざ〳〵正夢」と、語りもあへぬに四郎二郎、感心感涙肝にそみ、天を禮し地を拜し、懷中の繪筆繪絹をひろげ、「サア遊ばせ御傳授頼む」と悅びける。大夫「いかにも傳へ申さんが、親の免しもなき中に、筆取ることは如何なり。アヽ何とせん、實に思ひ付たり。あの御供の人の立姿を松の立木になぞらへ、笠を枝葉の笠となし、

- 御了簡云々―御機嫌と同時に交際も厭き事なれば助力ありたし
- 此身に沈む―此遊女になれる事
- まざ〳〵―ありあり

こゝにて學び見せ申さん。それにて寫し留給へ。是そこな奴樣、爰へござんせ雇ひまし
よ」奴「ない〳〵〳〵」手ふる頭ふる年ふる松の、松根によつて腰つきも、千年の綠寫せ
しは作意なりけり。先哥人の見たてには、一本松を二木共、三木とつらねし言の葉の、
それは老木の松が枝なれど、寫す若木の奴の〳〵〳〵、此の膝のふし松のふし、前へ地
摺の下枝に、ぬつと出せし片足は、慮外千萬千貫枝、筆捨枝や久かたの、天津少女のか
たくま枝や、腰掛枝の三がい松、月にさはらぬ枝々の、さゞれ小枝の松かげを、サア沖
こぐ船の帆のほの見へて、さす腕には壽福の枝、をさむる手には不老の枝、たれて雪見
のひかへの枝。是々これ〳〵、ずつと伸たるながしの枝。松は非情のものだにも、傳へ
し心の色はなほ、宛ら靑々條々として、松の生木のいき〳〵と、若やぎ立る其風情、狩
野は一點違ひなく、書つらねたる筆勢、何れを寫繪何れを立枝、紛ひつべうぞ見へにけ
る。元信「家の幸甚たり。早速歸り本懐とげ、此報恩には御身の上、父御のことも請取
申。萬のお禮は本國より」と、立歸るを、大夫「是申、神の告に任せしからは、恩にはかけ
ず末かけて、情を思召すならば、必外に内義樣持てばし下んすな。奴殿賴みます」奴「何
が扨〳〵、天神樣より大夫樣、追付お二人連理の松、中に立たる此松は、島臺持ての取

松根云々―倚松根而歷櫻千年綠滿手云々（和漢朗詠集）
三木―見きと掛く、稀季通、武隈の松は二木を都人いかゞと問はゞ三木と答へん
千貫枝―一枝千貫の價と云ふ諺
かたくま―肩車
さゞれ―細小の意
はの見へ―灰かに見へ
天神―大夫の次の位を天神といへば掛けたり

結び、千年萬年萬々年、とぢ付ひつ付松脂の、離れぬ中」とぞ三重壽きし。されば江州高島の館、左京ノ大夫賴賢卿、參勤の上洛有、執權不破ノ入道道犬、同嫡子不破伴左衞門宗末、國を預る留守居也。御家の繪書長谷部ノ雲谷遽だしく、入道親子が前に手をつかね、「近比過言に候へども、某ことは雪舟のてきでんとして代々の御扶持人。此高島のお舘にて、繪筆を取て誰人か拙者が上につき申さん。然るに此度狩野とやらん申一才、武隈の松を書しとて、過分の恩賞を下され、古參を踏付御前にはびこり、剩今日は奥方へ召され、姫君樣よりお料理を下さるゝと承る。殿樣の御留守誰が免しての推參。御家老の仰一國に違背申者はなし。きつとお仕置然るべし」とぞ支へける。道犬頷き「つゝと寄れ雲谷、惣じて此四郎二郎めは、相役名古屋山三が取持にて召し出された。山三は元來お小姓立、前髪の酒林で殿を醉はせし男傾城、口ばしの黄な小雀が、家老竝につらなり、威をふるふ其山三めを甲にきて、のさばりまはる四郎二郎、我々親子が睨め共、事共思はぬ奇怪さ。其方とても同前たり。又をとの姫君銀杏の前は、御愛子なれ共脇腹故、御臺所を憚り給ひ、田上郡七百町の御朱印を付られ、京都有德の町人か、由緒有御家中へも、下されんとの御内意故、某嫁に申請、此伴左衞門に緣邊し、七百町をぬしづかん

的傳—他人に傳へぬ傳授を受けたる者
二才—青二才

酒林—酒店の前なる杉葉の束、之を若衆の前髪に寄す
甲にきる—かさにきる
有德—富豪
ぬしつかん—我物にせん

と、當はめて置た物。姫君狩野めに心を通はし、今日密々祝言有と、奥目付より聞きたれ共、御意と有ばせんかたなし。御在京の其間は、山三めも留守なれば、彼奴が方人する者なし。少しにても過りを、隨分見出せ聞出せ。慮外をせば打ち殺せ、御留守の間國中は、某がさばきなり。此不破といふ鰐が見いれて、あまり程は有らせまい。試して見たい新刃はないか。一の胴か二の胴か、望んで置け」といひければ、雲谷甚笑壺に入、「政道正しき御家老様、お屋形のしん柱」と、追從たら〳〵見ぐるしし。斯とはしらず四郎二郎、櫻の間に伺公し、「姫君銀杏の前様より、御掛物を仰付られ、持參仕候。御取次頼み奉る」と、いへ共入道伴左衛門、じろりと見たる計にて、返答もせず睨付る。元「ヤアしれ者よ。そばには雲谷、いかさま我に手を取らするたくみ有、立歸るも不覺なり。幸々奥へ通路の鈴の綱」ふりはへひけば鈴の音、「おふ」と答ふる女の聲、宮内卿と中老の局立出で、「ヤア狩野殿か。姫君様の御待兼、お直の御用も有とのお事。サア〳〵此方へ」と有ければ、畏て四郎二郎入らんとすれば、伴左衛門聲をかけ、「待て〳〵〳〵。お家の掟を知ずんば、なぜ物頭には伺はぬ。知て背くか不屈千萬。上より御免しなきに、刃物を帶し奥方へ參ること、禁制との御條目。あれ大小挽いで引摺出せ。當番〳〵」

見いれ—見込む

いかさま云々—成程我を罪に陥す巧あり

と呼はれば、宮内卿、「いや是は私ならず、姫君樣より殿樣へ御伺ひ、則京より名古屋山三殿の指圖にて、奥へ召るゝ四郎二郎、なんのお咎ござらふ」と、いへ共更に聞入ず、道「お留守を預る家老の耳へ承らぬ御意なれば、殿の御意でも叶ぬこと。それ伴左衞門腕いで取れ」半「まつかせ」と立あがる。四郎二郎も身がまへして、縋らば切らんず眼ざし、左右なくも寄りつかず、半「サアヽ渡せ〳〵」と、詞でおどす計なり。時に奥よりお腰本つか〳〵と出、「是々いづれもお姫樣より御意が有。四郎二郎には直に御用のことあれ共、丸腰でなければ奥へ通さぬ御法度とあれば、是非に叶ず姫君樣、此所へ御出との仰なり。四郎二郎は御用人、其外の男の分、雲谷は云に及ばず、御家老殿を始め御前へはかなはぬ。皆お廣間へ立ませい〳〵」との權柄さ。道大親子無念ながらつゝと立て、「サア雲谷姫君の御前へは、男たる者罷り出ず。男でもない奴原に、侍の時宣無用の沙汰」と、四郎二郎に刀のこじり打あて〳〵袴の裾、踏たゝくつて白眼付、お次の間にぞ出にける。御留守といひ女中の邊、なを穩便に事共せず。元「御好の掛物、梅に淡雪雉山鳥、仕つて候」と、紐を解て懸ければ、局「このよし披露致さんに、サアまづゆるりと、お茶進じや」と、局は奥に。腰元「あい〳〵」と愛想らしき聲々の、男の側へ寄ごとは、常に梨地の煙

まつかせ―よしきた
左右なく―迂濶に
丸腰―腰に刀佩かぬ事
畑用人―用人なれば居つても構はぬ
なに穩便に云々―不破の無法を元信は女中の前なれば穩便にして逆らはずまづゆるりと云々―ゆるりは元信

に、茶道じやは腰元への詞

脇詰―娘の著る振袖を詰て長姿になる

いなせ―否應

欲心―七百町貰ひうとの欲

草盆、落雁かすてら羊羹より、菓子盆はこぶ腰本の、饅頭肌ぞ懐かしき。物に臆せぬ男なれ共、女中の色に目うつりして、氣を取られたる折ふし、十八九成脇詰の後結びも各別に、銚子盃前に置、しとやかに手をついて、「私はお姫様のお髪上、藤袴と申者、しみ〴〵お咄致しませいとの御事ぞや。御存の通、お妾腹のお姫様、御臺様への憚りにて、大名高家のお望なく、心次第縁次第と、田上郡七百町、御朱印握つて殿好み。情ないは其許様、いつぞやより色々と、お乳の人お局、口のすい程勧ても、どふでもお請ないとのこと。おいとしや姫君は、餘りのことに戀こがれ、私をお寢間へ召し、「ヤイ藤袴、切てのことにそちなりと、四郎二郎と名を付て、心ゆかしに抱て寢よ。そちもおれを抱しめて、姫かはいひと云ふて呉」と、もがき言がおいとしさ、とんと下紐打解けて、寢程抱く程締る程、二人の心せく計、どちらぞ男になりたい、と云うても泣ても叶はぐこそ。なふ大名の手業にも、有べき道具の足ぬのは、ひよんな物とておむつかる。自にいなせの返事、聞切參れとのお使、私も一分立つ樣に、お返事なされ」と述にける。元信額を疊に付、「冥加に余る仕合ながら、度々お返事申如く、諸傍輩のそねみと申、慾心に紛るゝこと世間のあざけり、よし御機嫌に違ひ改易仰付らるゝとて、御恨候まじ。御

にべもなふ—無愛想に

ごどを云々—念つかるゝ

繪筆云々—繪書かいても様はぬ

きりかー不詳

三平二滿—もたゝ

しやちら云々—硬ばつた事

請とては成がたし。よき樣に御取なし、賴入」とぞいひ切たる。藩ハヽアにべもなふ埒あいた。如何にとしても上つ方へ、左樣な慮外申されまじ。少し物に品付て、始より約束の女房有と申なば、お胸の晴ることもある。去ながら、其女房は何者と、ごどをつかるる念の爲、今こゝで私と夫婦かための盃して、とつと前から藤袴と、契約有と申さば、いかな主でも大名でも、此道計はせんが先。此談合はどう御ざんしよ」元「ヲヽウ幸望む所。サア盃仕ふ」藩「いや〳〵いや〳〵、我とても假にはいや。佛神掛ての女夫ぞや」元「誓文々々繪筆をとらぬ法もあれ、こふじや〳〵」と抱き付。「近比嬉しい言の盃」と、一つ受て元信に、「妻の盃頂く作法、儀式はかたふ」と四海波、腰本中が謠ひつれ、奥よりお局島臺に、七百町の御朱印箱、局「姫君樣の御祝言、三國一」とぞ祝ひける。四郎二郎合點のかず。逃んとするを抱きとめ、姫「藤袴とは假名ぞや。自こそは銀杏の前。誓文だての盃、いやは成らぬ」と宣へば、元「いや我らの名ざしは藤袴。外に妻は是なし」と、尙いぢばれば腰本衆「そんなら本の藤袴、早ふ〳〵」と呼出す。お茶の間のきりかど五十餘りの、厚化粧、三平二滿の口紅、しなだれ懸る會釋顏、「是がなんの藤袴。しやちらごはい皮袴」と、どつと笑ひのどやくや紛れ、盡せぬ妹脊と成給ふ。

どやくやー混雑

ほろゝ云々ーはろゝのほろと雪ふるのふると紙くれば亡ぶるとなる

斯る所へ不破伴左衞門宗末、雲谷を伴ひ、遠慮もなく座上にずつかと直り、「是四郎二郎、汝如何成野心にか、お屋形を調伏し、亡さんとの存念有。きつと詮議を遂ぐべき旨、父道犬が下知、申譯仕るか、直に繩をかけふか」と、はや繩たぐつて見せかけけり。四郎二郎些とも騷がず、「せめて形の有ことには申譯も有るべし。御屋形調伏とは此方の云譯より、まづ御咎めの證據承はらん」とぞ答へける。雲谷下座より「こりやゝ〳〵證據は某よ。惣じて繪書の祕密にて、繪をかいて調伏すること、人は知らじと思へ共、此雲谷が見付た。此掛繪は和主が筆、梅に山鳥雪に雉。抑當家は高島の御屋形と號す。山へんに鳥と書ては島とよむ文字なり。梅の梢に山鳥の高々と留りしは、是高島にあらずや。雉にほろゝの聲有て、雪はふるとの心有、讀くだせは高島亡ぶる調伏。狩野とはかりの野とかけり。姫君と心を合屋形を亡し、一國をおのれが狩場の野原にせんずる表相、重罪遁れず繩かゝれ」と取付所をひつぱづし、胸板はたと蹴倒すまに、飛かゝる伴左衞門が眞向、刀の柄にてはつしと打、直に拔んとする所を、隱し置たる取手の者、十手八方鐵鞭を、ぶち立〳〵捻ふせて、高手小手にいましめ、黑書院の床柱に思ふさまに、縛り付、件「姫君の御朱印を、奪取れ」と群がるを、女中手々に枕鐵、長刀にて引つゝみ、圍ひ

あけずの門―常にあけぬ門

鳥居立―二王立といふが如し

あいつたしーアア痛し

電もく云々―電猛智威か

怒り符―怒り斑

防げば餘さじと、奥を差てぞ追つめける。腰掛に控へし雅樂介、かくと聞よりたまられず、かけ廻つても奥方の、勝手は知らず中口の、あけずの門碎けてのけと扉をたゝき、雅「狩野ノ四郎二郎元信が弟子、雅樂介之信と云草履取、主といひ師匠なり、死ぬる道なら共に死なん。高が繪書の丁稚づれ、怖いことも有まい。相手の首取分のこと。開けよ明よ」と貫の木も、折る計に踏たゝき、鳥居立にぞ跨つたる。元信内より、「雅樂介か滿足した。身に過りなき上に慮外をして、姫君の御身のあやまち氣遣し。歸れ〳〵」と呼はれば、雅「アヽ慮外と云もことによる。あけずば踏んで踏破る」と、わめき散せば雲谷不破、「雅樂介を打殺せ」と、引返して門の貫の木、はづす所をつけ入に、雲谷が小びたひずつぱと切下げたり。あいつたしと跳りあがり、二人拔きつれ打かくる。あなたへ追詰こなたに支へ、城下をさして三重切出る。四郎二郎地團太踏んで、「エヽ佞人共むざむざとは死ぬまい。親より傳し一心の繪筆はこゝぞ」と觀念し、右の肩に齒を立て、ふつつ〳〵と喰破り、口に我身の血を含み、襖戸に吹かけ〳〵、口にて虎をぞ書きたりける。電もくらいゐの眼の光り、怒り毛怒り符怒り爪、千里も駈ん勢なり。道犬は姫君の行がた尋ね廻りしが、「まづ繪書めから仕まはん」と、太刀を拔んとせし所に、俄に吹

くる風さはぎ、繪にかく虎は形を現じ、牙をならして哮かゝる。道犬も強力者、組止めんといどみあふ。虎は猛つて爪をとぎ、邊を蹴たてゝ三重揉合しが、元よりの不思議の猛獸、道犬が襟髻ひつ咥へ、打かたけくるり〳〵、くる〳〵〳〵くるり〳〵と持て廻り、一振ふつて投ければ、塀を打越敷石に頬をすつてぞ打付ける。虎は勇で元信の、縛を嚙み切、背を差むけてぞばへたり、元信頓て心付、袴の股立しぼり上、ひらりとこそは乘たりけれ。虎は千里の足早く、風に嘯く身もかろく、追來る敵を追散しかけちらし、堀も築地も跳り越へ、飛びこへ跳越へかけり行く。豐干禪師が四睡の虎、李將軍は虎をくむ。繪にかく虎を動かすは、古今一人乘たも一人、天下一人一筆の、譽は世にぞ三重殘りける。げに獸君の一靈、山野にはびこり草木を踏おり、田畠を荒すことなゝめならず近鄕の百姓こゝぞ〳〵に、「三井寺の後から藤の尾迄は見屆た。此山科の藪かげへ逃こんだに極つた。皮に疵を付ずに毆き殺せぶち殺せ」と、とり〴〵喚き評諚す。庵の内より棒ついて、小灯燈提たる男、「ヤヽ何者じや人の軒、打の殺せのとは胡散なり」とぞ咎ける。耳「いや是は矢橋粟津の百姓共。此比設樂山から虎が出て暴る故、隣鄕が云ひ合せ、此藪へ追込だ。搜させて下され」と口々に呼はれば、侍あざ笑ひ、「やい、虎と云獸が日

豐干禪師云々―豐干禪師と寒山拾得が虎と共に睡る圖を四睡圖といふ　李將軍―漢の李廣

ぞばへ―戯る

本に出た例なし。十方もないこと、夜盗押入の手引か。此庵を誰とか思ふ、土佐の將監光信と云繪師。子細有て先年勅勘を蒙り此所に逼塞し、將監年は寄たれ共、某は門弟修理之介正澄と云者。油斷はせぬ」と、棒ふり廻しいさかふ聲、將監夫婦障子を明、「聞た聞た。天地の間に生ずる物、有まい共極めがたし。諸共捜せ」と鑓熊手、ひつ提〳〵ゑい〳〵い聲、たい松ふつて狩立る。一むら竹の下蔭に、「そりやこそ物よ」と火を上れば、暴にあれたる猛虎の形、人に恐るゝ氣色なく、背をたはめてぞ休み居る。將監横手を打て、「あら不思議や顔輝の筆の、竹に虎の筆勢に、少しも紛ふ所なし。是は誠の虎にあらず。名筆の繪に魂入て、顯はれ出しに極つたり。然も新筆今是程に書んず人は、狩野ノ祐勢が嫡子四郎二郎元信ならでは覺えなし。いづれにもせよ證據には足跡有まい」「物は試し」と百姓共、若草わけて尋れ共、虎の足形あらざれば、「かき手も書手目利もめきゝ、前代未聞の名人や」と、心なき土民等も、拜む計に信をなす。修理之介七足去つて師匠を拜し、「ア、有がたや此虎を見て、繪の道の悟りを開き候そのしるし、我筆先にてあの虎を消し失ひ申べし。名字名乘をさづけ、御免しを受け度候」と、懇望あれば將監悅び、「ヲヲ今日より土佐の光澄と名づくべし」と、印可の筆をあたふれば、修理はいたゞき墨を

温塞―閉門に似て輕し

顔輝―元の畫工秋月の事

七足―師の隆は七尺の譬による

染、虎の順にさし當、四五間間を置ながら、筆引かたに從つて、頭前脚後脚、胴より尾先に至る迄、次第に消て失けるは、神變術共いひつべし。百姓共舌をまき、「孫子迄の咄の種、なふあの上手な繪書殿に、よいお山を十人程書てもらひ、金儲がしたい」と云へば一人が聞て、「ヲヽ〳〵冬年お目に懸つたら、借錢乞の帳面を爰から消てもらはふ物。お暇申」と打ち笑ひ、在所々々へ歸りけり。こゝに土佐の末弟浮世又平重起と云繪書あり、生れ付て口吃り、言舌明ならざるうへ、家貧て身代は、薄き紙子の火打箱、朝夕の煙さへ一度を二度に追分や、大津のはづれに店がりして、妻は繪のぐ夫は賣く、筆の軸さへ細元手。上り下りの旅人の、童賺の土產物、三錢五厘の商ひに、命も錢も繋ぎしが、日蔭の師匠を重んじて、半道餘りを夫婦づれ、よな〳〵見まふぞ殊勝なる。夫はなまなか目禮計、女房傍から通主して、「まだ是はお寢りませぬ。誠にめつきりと暖に、日も永ふなりまして、世間は花見の遊山のと、ざは〳〵さは〳〵致しまする。こなたは山影御牢人の、お徒然をいさめの爲、嫁菜のひたしに豆腐の煮染、さゝゑでも致シまして、關寺か高觀音へお供して、春めく人でも見せませふ、と女夫申て居ますれ共、心で思ふたばつかり。道者時分で見世は忙し、洗濯物は支へる、仕事にははかいかず、日が

順―不詳

火打箱―小さい形容

一度を云々―一度の食事を二度に分ると掛く

めつきり―俄に

通主―通譯

牢人―浪人の事

いさめ―慰め

さゝゑ―酒を入れる竹筒

道者時分―伊勢參宮時

急げば云々―武夫の矢走の船は早くとも急がば廻れ勢田の長橋（源俊類）
ゆめ〳〵しろ―尽々しろ
おはもじ―も恥かし
あやかり―似る
時節―よい折
藤の花云々―二ツ共ナ津繪によく畫く繪なれば、ぶら〳〵に垂けたり

な一日立ずくみ、何をするやらのらくらと、急げばまはる瀬田鰻、只今膳所からもらひまして、練貫水の大津酒、ゆめ〳〵しうございますれ共、此春からお仕合がなをつて、鱧の穴から出る樣に、御世にお出なされませ。ほんにつべこべ〳〵と、私が云ふことばつかし。こちの人の吃と私がしやべりと、入合せたらよい比な、女夫が一組出來ませふ。アヽおはもじや」と笑ひける。北の方聞給ひ、「チヽよふこそ祝ふてたもつた。今宵は奇妙なこと有て、修理は名字を免され、土佐の光澄と名乘ぞよ。其方もあやかり給へ」とあれば、又平「時節」と女房を、先へ押出し背をつき　我身も手をつき頭をさげ、訴訟有げに見へければ、女房心得進み出、「誠に道すがら百姓衆の咄を聞、身は貧なり不具なり、弟弟子に土佐を名乘らせ、兄弟子はうか〳〵と、いつ迄浮世又平で、藤の花擔げたお山繪や、鯰おさへた瓢箪の、ぶら〳〵生ても甲斐なし、と身をもんでの無念がり　尤とも憐れ共、連添ふ我等の心の中、申も涙がこぼれまする。奥樣迄は申せしが、お直の願ひは此時節、今生の思ひ出、死しての跡の石塔にも、俗名土佐の又平と、御一言のお免しは、師匠のお慈悲」と計にて、涙に咽び入ければ、又平も手を合せ、將監を三拜し、疊に咥付泣きゐたり。將監元より氣短く、「ヤア又しても〳〵叶ぬことを吃めが。こりや此將監

は、禁中の繪所小栗と筆の爭ひにて、勅勘の身と成たるぞ。今でも小栗に從へば、富貴の身と榮ふれ共、一人の娘に君傾城の勤めをさせ、子を賣て食ふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ。土佐の名字を惜むにあらずや。修理は只今大功有、をのれに何の功か有。琴棊書畫は晴れの藝、貴人高位の御座近く參るは繪書。物も得いはぬ吃めが推參千萬。似合ふた樣に大津繪書いて世をわたれ。茶でも呑で立ち歸れ」と、愛想なくも叱られて、女房は力を落し、「此方を吃に產付た、親御を恨みさつしやれ」と、賴みなく〳〵又平も、我咽ぶえを搔むしり、口に手を入、舌をつめつて泣けるは、理り見へて不便なり。時に藪の内よりも、「將監殿光信殿」と呼はつて、痛手おほたる若者、緣先によろぼひ立、「狩野の弟子雅樂之介御見忘れ候か」脣實も〳〵雅樂の介、まづ此方へ」と座敷に入レ、承れば四郎二郎殿、雲谷不破が惡逆にて、難に逢ひ給ふ段々、具に聞。氣遣し」とありければ、雖さん候某も供仕、雲谷と戰ひ斯樣に深手を負候。賴み切たる名古屋山三殿は在京、元信危うく候ひしが、漸のがれ落うせたると承る。こゝに難義の候は、姫君銀杏の前元信を憐み、七百町の御朱印を持て落給ひしを、敵奪ふて下の醍醐に隱れし由、二度姫君屋形へうつし、御朱印奪ひ返さでは、永く繪師の瑕瑾なり。某手負の身は叶ず、御加

勢頼み申さん爲、忍び參り候」と語りもあへぬに、將監皆聞迄に及ず、將「狩野と土佐は一家同前、力に成て參らせん。されど共彼奴らと太刀打は、いッかな〳〵叶ふまじ。姫君にも貧傷あらん。どふぞ辯舌のよき人に、御屋形の御意といはせ、たばかつて取返す分別がござらふ。何れも云ふてお見やれ」と、額に小皺頼杖つき、各小首を傾くる。又平何ぞ云ひたげに、妻の袖引背中つき、指差すれ共合點せず。しんきをわかし女房を引きのけてつゝと出、師匠の前に諸手をつき、唾を飲みこんで、又「此討手には拙、せしやが參り、姫君もゴウ御朱印もウ〳〵〳〵うば奪取て歸りましよ」將監きつと見、「ヤア面倒な吃め、思案なかばに邪魔いるゝ。そこ立てうせぬか」と、叱られてもおぢるにこそ。又「イヤ膝共談合と申。口こそ不自由なれ、心も腕も天下に怖い者がない。拙者が分別出し、叶ぬ時はゑん正すけさだ、あつちへ遣るか此方へ取か首がけの博奕。命の相場が一分五厘、浮世又平と名乘ては、親もない子もない身がら一心、命は掃溜の芥、名は須彌山とつりがへ。悴の時から舊功なし、命にかへて申上るも、師匠の名字を繼たい望ばつかり。拙者めを遣はされて下されませ。申〻申〻、さりとては御承引ないか、吃でなくば斯うはあるまい。エ〻〳〵〳〵恨めしい喉笛を、かきやぶつてのけたい女房共、さり

頼杖つき—思案の體
しんき云々—氣を揉む
せしや—拙者
ゑん正云々—詰定の名刀にて首のやりとりする
命の云々—浮世も命も輕い諺
須彌山—重い喩

とは情ないお師匠じや」と、聲をあげてぞ泣居たる。將監なをも聞入なく、「不具の癖の述懐涙不吉千萬。相手に成ては果しなし。是々修理ノ介、御邊向つて思案をめぐらし、奪ひ返し來られよ」弩「畏つた」と云ふより早く、刀ほつこみ立ち出る。又平むんずと抱留て、「マヽまんまん待てくれ。師匠こそ情なく共、弟子兄弟の情じや、此又平を遣てくれ。殿共いはぬスツスヽすつ〳〵すり樣」弩「こりや又平、某矢竹に思ふても、師の命は力なし。こゝを放せ」又「イヽ〳〵いやハヽ〳〵〳〵放さね」弩「放さねば拔いて突ぞ」又「ツヽつきコヽ〳〵〳〵殺せ。ハヽ〳〵〳〵〳〵放しやせぬぞ」修理ノ介ももてあつかひ、「放せ〳〵」と捻ち合ふたり。將監夫婦聲を懸け、「放せ〳〵」と留むれ共、耳にも更に聞き入ず。女房取付、「あれお師匠樣の御意が有。おとましの氣違や」ともぎ放せば、女房を取て投、はたと蹴て白眼付、又「おのれ迄が氣違とは、エヽ女房さへ侮どるか。不具は何の因果ぞや」と、どうど座を組み疊をうつて、聲も惜まず歎きける、心ぞ思ひやられたる。將監重ねて「汝能合點せよ。繪の道の功によつて、土佐の名字をついでこそ、手柄共云ふべけれ。武道の功に繪書の名字、讓るべき子細なし。成らぬ〳〵」と云切給へば、女房居直り、「サア又平殿覺悟さつしやれ。今生の望は切たぞや。此手水鉢を石塔

殿共いはぬ云々―修理を崇めた詞、殿は樣より輕し（俚言集覽）

おとましーいやになる

おくり號―謚
苔に朽る―地に朽果つる

と定め、こなたの繪像を書とゞめ、此場で自害し其跡のおくり號を待つ計」と、硯引よせ墨すれば、又平頷き筆を染め、石面に指向ひ、「これ生涯の名殘の繪、姿は苔に朽る共、名は石魂に留まれ」と、我が姿を我筆の、念力や徹しけん、厚さ尺餘の御影石、裏へ透つて筆の勢、墨も消ず兩方より、一度に書きたる如くなり。將監大きに驚き給ひ、「異國の王羲之趙子昂が、石に入木に入も、和畫に於て例なし。師に優つたる畫工ぞや。浮世又平を引かへ、土佐の又平光起と名乘べし。此勢ひにのつて姫君御朱印諸共に、取返せ」と有ければ、「はつ」と計に又平は、「忝し」共口吃、禮より外は涙にくれ、踊り上り飛あがり、嬉し泣こそ道理なれ。將監夫婦悅ビ、「心功にて心ざし厚けれ共、敵に向つて問答せんこと、いかゞ有らん」と宣へば、女房聞もあへず、「常々大頭の舞を好き、妾諸共つれわきにて舞はれしが、節の有ことは少しも吃り申されず」と云ふ。將「やれ夫こそは究竟よ。試に一節目出度ふ舞ふて立て」又「あつ」と答へて立上り、古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞ふたりけれ。舞詞「去程に鎌倉殿、義經の討手に向くべしと、武勇の達者を選ばれし、それは土佐坊、是は又土佐の又平光起が、師匠の御恩を報ぜんと、身にも應ぜぬ重荷をば、大津の町や追分の、繪に塗る胡粉は安けれ共、名は千金の繪師の家、今墨色を

王羲之云々―此二人有名の書家にて書ける文字自ら木石を穿つと云ふ
功―闕か
大頭―能に似たる女舞
大津―大任を負ふに掛く

山水男―身窶ちしい男

繪本―手本にかけたり

火ようじ―火の用心

やごとなき―貴き

揚げにけり」斯て女房勇みをつけ、「又もや御意の變るべき。はや御立」と勸めける。又「チヲいしくも申されたり。身こそ墨繪の山水男、紙表具の躰なり共、朽て朽せぬ金砂子極彩色に劣らじ」と、勇み進みし威勢は、由々し賴もし我ながら、天晴繪筆の殊勝さよ。唐繪の樊噲張良を、たてについたと思しめせ」お暇申てさらばとて、打立出る威勢は、誠に諸人の繪本ぞと、チヽ譽ぬ者こそ三重なかりけれ。逢坂の關、曙近き火ようじの、聲高島の屋形には、六角殿の姫君行方見へさせ給はぬとて、旅人の改め問屋の詮議、土を返さぬ計なり。又平は今朝七ツ立ち、門出祝ふ中椀に、例の熱燗三杯ひつかけ、うつ立つ所に、やごとなき上臈の、跣足の土に身も頽れ、伏見の方よりうろ〳〵と、上「是そこな者、京の道を敎へてくれ。草鞋とやらいふ物をはかせてくれ」と、詞つきの横柄さ。又平むつと貌に立はだかつて返事もせず。女房走り出、「大抵のお方でない。威の備はつた見所有」とお側に參り、女房「恐れながらお屋形の姫君樣と見參らす。我々は土佐の將監が弟子、吃の又平と申繪書の夫婦。狩野の弟子雅樂の介に賴まれ、お迎ひに參る折柄なり。必包ませ給ふな」と、さゝやけば嬉しげに、上「チヽ自こそ銀杏の前、道犬雲谷が追手すき間なし。よい樣に賴むぞや」と宣へば、又平土邊に額をすり付、悅びの色勇

居合―長き刀を自由に扱ふ術
埴生―見苦しき小屋
八町云々―大津八町を走るとかく、走井は其所の名井
さしもの―錢しにかく

みの色、氣を急けばなほ物云はれず、心を仕方の腕まくり、力み反打居合の眞似、拔打撫切拜打、組合捻首手にとつて、握り拳の武士氣をあらはし、埴生にかくまへ參らする、夫婦が所存ぞ賴もしき。程なく八丁走井の問屋組頭、組町引具しおこしかへつて聲々に「六角殿の姫君朱印を盜出給ひ、御家老より御穿鑿、裏屋小路もあらためよ。別して繪書は屋搜し有。人は勿論犬猫も内を出すな」と裏口門口、ばた〳〵とさしもの又平取こめられ、狩場の鹿の如くなり。不破ノ伴左衞門長谷部雲谷、著込の兵百騎計、むら立來つて家々に、押入々々搜しける。又平一期の浮沈ぞと、女房諸共姫君を押し圍ひ、隣を「がは」と蹴破て、ぐつと拔けたる壁あつき、氷の樣成大刀物、又「さし出す首を片はしから　キ、〳〵〳〵〳〵切ならべん」と、壁に添ふてぞつゝ立たり。雲谷聲をかけ、「ヤアヤア是ぞ音に聞、土佐が弟子吃の又平めが住家なり。敲きこぼつて搜して見よ」兵「承る」と一番手、「捕た〳〵。捕つた〳〵」とどつと寄しが　しどろになつて引返し、兵「なふ怖やすさまじや。何かは知らず家内には、人大勢みち〳〵て、或は奴の形も有、又は若衆女も有。人間ばかりか猿野猪鷲角鷹、爪を研きたて眼を瞋らし、寄付るゝことでなし。なふ〳〵いやや」と身ぶるひし、舌を捲いてぞ恐れける。伴「何を吐す狼狽者、人三人とも

しどろ―亂雜

住まれぬ荒屋、何者か有べきぞ。察する所見世に張たる三文繪を生物と見違へしか。怖いと思ふ心から、眼が眩んだ腰抜共、それ〳〵蔀をこぢ放せ。ぬるい〳〵」と下知すれば、鳶口ひつ懸「ゑいや〳〵」と、なんなく見世を放しけり。内を見れば不思議やな、いひしに違ひも荒奴の、影ともわかず幻とも、まだほのぐらき曉の、鳥毛の鑓さき揃へしは、土佐が魂寫し繪の、精靈なりとも知らばこそ、我も〳〵と驅け向ひ打てども突けども手に取れぬ、露の命を君にくれべいと、そめしだいなし嫌ひなし、相手えらばず防ぎたり。雲谷が弟子長谷部の等巖、「數にも足らぬかす奴、我に任せ」と捲りかゝれば、片肌ぬいだる立髪男、大盃をひらり〳〵と閃めかし、眉間にふつたる唐芥子、箸「ヲヽ、辛、ヲヽ、から」からにしき、黒白も別かず引かへす。師匠の雲谷堪りかね、「片端より打みしやぎ、手なみを見せん」と飛んでかゝる。優しや優者の女わざにはきどく頭巾、藤のしなえをおつとりのべ、引纏ふてはたと打、しとと打つをひらりと外し、受けつほどいつ麻衣の玉襷、かひ〴〵しき若き法師の現れ出、勇みかゝれる有樣は、なみや鯰の瓢簞〳〵、持つてひらいて鉢叩き。叩けばすべり、打てはすべり、ぬらり〳〵と手に堪らず、倦みはてゝぞ支へたる。不破が郎等犬上圓八、「そこ退き給へ人々」と、

鳶の命—果敢なき命を君に與へん（唄の文句）
そめしだいなし—紺の着物と無茶苦茶の意とかけたり
ぬるい—手ぬるい
鳥毛—鶏にかく
きどく頭巾—奇特にかく、女の被る覆面づきの頭巾（嬉遊笑覽）
鉢叩—頭を叩く

沈返し—腑を曲げて枕返する手づましやー鳳聖

木綿付鳥—鶏、逢坂関の祭に鶏に木綿を著けて放つよりいふ

廻らぬ云々—舌の廻らぬに物いふは無用

打つて出るや現の闇の、座頭一人とぼ〳〵と、とぼつく杖をふり上げ〳〵、盲目打にうつてんけり。「餘さじ物」と續いてかゝる團八が弟犬上三八、二八計の小人枕がへしの曲枕、おつ取〳〵はらり〳〵はら〳〵〳〵、うつ波枕かず枕、枕重に打亂れ、散り〳〵にこそ引たりけれ。伴左衞門怒をなし、「手にも足らぬ雜人ばら、しや何ごとか有べき。武士の刀のあんばい見よ」と、眞一文字にかけたりけり。伴「あら凄じやこはいかに」姿は沙門頭は鬼神、鬼の念佛嚙みくだく、牙を鳴らし角をふり、向ふ者の眞向、撞木を持つて叩き鉦、くわん〳〵〳〵〳〵、耳にこたへ骨に染み、進みかねては引き足も、隼荒鷹鷲角鷹、一度にさつと飛び來り、むらがる勢を八方へ、追つ立て蹴立てつゝきたて〳〵、翼の嵐夜明の風、三重鷲の聲々逢坂の、木綿付鳥にしら〳〵と、白み渡れば白紙に、有し形は彩色の、繪に寫りたる筆の精、天骨の妙とも云つつべし。又平勇んで女房の袖を引、物はいひたし心進んで舌まはらず、只「ウ、〳〵」と計なり。妻「エ、爰な人敵が詰かけ事急な。廻らぬ舌をいはれぬこと。舞で〳〵」といひければ、又「チ、それよそれよ氣がついた。今目前の不思議を見よ、我らが手柄で更になし、土佐の名字を繼だる故、師匠の恩の有難さよ。敵の中へ駈け入て、命限りに追散さん」と、大勢にわつてい

蜘手かくなは―桝かけ四角

里―島原
通ひ足らぬ―猿は人間に似通へども毛三筋足らぬといふ諺を利かせたり
三筋町―島原の町名
遲襟―閑けの縁迄に用ふ
忘八―仁義八行を忘るといふより出でたり、女郎屋の亭主
白茶字―舶來品の絹布、羇地に

り、西から東北から南、蜘手かくなは十文字、割りたて追廻し、さんざんに切り立てられ、さしもの軍兵堪りかね、八方へ遁け散つて、殘る者こそなかりけれ。又さあしてやつた此上は、コ、〳〵〳〵爰には片時も叶ふまじ。都の方へと姫君を」ヲ、〳〵〳〵ヲヲ逢坂山の時鳥、まだ初聲の口は吃り、心は鐵石かなおとがひに、勝つた優れた越へた峠は日の岡の、石原草原足もしどろにどよ〳〵〳〵、吃り廻つてのよ〳〵〳〵登りける。

中之卷

里は都の未申なり。通ひても通ひたらぬぞ三筋町、西ノ洞院中道寺、衣紋が馬場の一方口、未大門の遲櫻、忍びてひらけ一ばん門の東がしらむ。ドンどんと打たる太鼓の番太、「何者やら大門口に切れてゐる」と呼はる聲に、忘八屋揚屋茶屋駕舁廓の年寄立合、見れば年比卅計、究竟の侍、一つ重ねの白無垢白茶字に、縫紋紅裏に源氏雲の裾くよみ、南蠻ごろの大小對の金鍔毛彫は波に山王祭、七所御物蒔繪の印籠、天川珊瑚珠は然もなくて、大疵五ケ所肝先にとどめ有と、委細に書付、官領所へ訴へさせ、死骸を圍ふ横はしご、二階から女郎かひて、遣手のかめは首のばし、松は寢ほれて顏出し、まだ

用ふ　然もなく―偽なし　女郎かひて―女郎買手と胡坐かくにかく　起き〳〵の―やつと起きたばかりの　引舟―ひくにかく引舟は大夫につく國女郎　牢人―浪人の事　以下皆同じ

起々の禿共、つね彌いぐ野と手を引舟も走つて來て、塀にくらかけ木に取付、禿「かほるは様あれ見さんせ、吉野様の大膽な、掃溜山へ上つて、海老の皮で足突かんすな」吉「い突たら大事か。切れて死る人さへ有」と、あだ口々の喧しさ。甲「あの切られてゐる人は、葛城様の大盡、不破ノ伴様に似たじやないか」乙「ほんにそふじや伴様に極つた」丙「サア伴左衞門が切れた」と京童の物見だけく、手負見がてら傾城見に、群集はおしも分けられず。すはや檢使と人を拂ひ、官領の雜式供人引具し、死骸を解いて疵改め、雜「江州高島の執權、不破の伴左衞門に極つたり。扨此者の買ふたる傾城は何と云。意趣有者の覺えはなきか、口論などはなかりしか眞直に申せ。當分隱して、後日に知れなば曲事なり」とぞ仰ける。年寄罷出で、「上林の葛城と申大夫を、千二百兩にて請出さるゝ筈の所、名古屋山三と申す牢人衆と葛城と、行末深い約束とて、談合成かね申せし故、兩方意趣を含み居られしが、是ならで覺候はず」と詳かにぞ云ひわくる。雜式「々口書し、「名古屋山三は牢人なれ共、元は伴左と傍輩、かたゞ大事の詮議なり。先葛城が遣手を呼べ」年「遣手出ませ」と呼ぶ聲に、玉は臆病年寄なり、玉「やら恐ろしや私が出てなんといはふ、縛られたら何様せふぞ。なふ悲しや目がまふた。氣付は無いか」と泣居たる。忠八「是では

埒が明まい。どれぞ機轉な遣手衆を、賴んで見ん」と云ふ内に、「出ませ〳〵」と頻の使、忌八「エイ思ひ付た。一文字屋の和國に付てゐる、みやと云ふ遣手は越前の敦賀で、遠山と呼ばれた全盛の大夫。戀故今はあの躰、すよどげなふて智惠まん〳〵。閻魔の廳でもいひぬける、此みやを賴まふ。あれ〳〵彼處へ、大福帳かたげて來るは、みやじやないか」といふ所へ、おしよほからげの忙がしげに、みや「皆さん是にござります。まあ〳〵きやうといことが出來まして、御苦勞でござんす」と、云ひ捨通るを、忌八「是々おみや、檢使の衆葛城が遣手を召るれ共、玉は愚鈍で臆病なり、何をお問なされふやら、いひ教へて濟ぬこと。廓中の賴みじや、葛城が遣手に成て出て、請返答をしてたも。恩に受ふ」と云ければ、みや「あの死骸の傍へ出ることか、アヽゑづ。去ながら、いやと云も子細らし。云ひ損なふたら大事か、口に任せて遣つてくれよ。てんぽのかは」とぞ出にける。雜式鑵鞭よこたへ、「をのれは葛城がやりてめか。用有て召出すになんとして遲なはる。横著者氣隨者」と、かさをかけてぞ叱らるゝ。みや「アヽ彼のさんわいの、頭から叱らんす。なんの氣隨でごあんしよ。十二人の大夫樣を一人して廻せば、辨慶遣手が忙がしさ。口說の中を押し隔て、打物業にて叶ふまじと、日に幾度の詑言やら、夜の身持は揚屋ゆ吸物同

すくどげなし―鋭き風なくてきん〳〵―滿々
おしよは云々―髷の結ひ方きやうとい―大變いやな
るイ―怖い云損うたら云々―云損うても構はぬてんぽの皮―まよかさをかけ―頁から

緋の袴―赤前垂の酒浴巾著云々―巾著の中は淋しいと也、此邊色々掛詞にて埋めたり　卯腹云々―卯の日には腹に灸を据えぬもの、次も同じ　背中に腹―背に腹はかへられぬ　皮切―初灸、凡て初手の苦を云ふに用ふもがり―騙賊　目の鞘外す―眼を八方に配る

前、ちよつちよと座敷へ出る度に、一杯づつも飲む酒に、ふら〳〵眠りのいき倒れ、朝から晩迄緋の袴、花色縮子の巾著も、中は秋の夜の長紐、提た鎹の穴から天を覗けばほのぼの明、妓様蓮の身仕廻風呂の、手洗水の髪洗ひの、鍋よ杓子よ臼よ杵よ、正月しまへば節句朔日、今日は二日の拂日なり。灸もすゑたし卯はら辰もゑ背中に腹、商賣には換られず。皮切こらへて出る心、其様に言はんすな。廓は諸國の立合、常住切つてのはつての是程の喧嘩は、お茶のこ〳〵茶の子ぞや。アヽ仰山な」と笑ひける。雜式怒つて、「いやさ己が身の上は問はず、此伴左衛門千二百兩にて、葛城を請け出すとな。傾城は賣物直段極る上からは、名古屋山三が妨いふても叶はぬ筈、然るを違亂に及ぶとは、汝等がもがりと覺たり。切手も知らいで叶はぬ筈。眞直に申せ」と詞あらく問ひかくる。少しも臆せず會釋して、「御意の通り賣物とは申ながら神佛の奉加と同じことで、銀出しながら拜するは、恐らく世界に傾城ばつかり。買ふてくれるが嬉しいとて、親がかりやお主持の、戀路の闇の一寸先、見へぬ所を傍から見て、買人のお身も廢らず、女郎ものほさぬ様に、舵を取るが引舟、目の鞘はづすが遣手の役。大事にかける證據には、世間に心中十ヲあれば、廓に一つ有かなし。伴左様は御大身、お銀に不足も有まいが、御主

人のお耳に立、お身のかい共成時は、御一門の評議にのり、人をはぐの欺すのと、おつる所は廓の難、爰の意氣をたてるが色里のたしなみ。身請の談合破れたも、伴左様のお身の上、大事に思ふ上の事でござんす。道で切れさんしたはそこ迄は存じませぬ。定めし死とも有まいし、尤遁げても見さんしよし、そこに如才も有まいが、先の相手が強いか、身の取まはしのわるさか、知らんでやんす」と答へける。檢使の人々もてあつかひ、雜一よいは〳〵もふ默れ。一時に詮議成がたし。死骸を酒にひたし置、後日の評定たるべし。それ〳〵」とて役人共、「桶をしつらひ死骸を納め、酒汲み入て繩がらみ、籠屋へやれ」と舁き上たり。雜式重て「年寄々々、商賣なれば傾城には構ひなし。去ながら夜前よりの買手共、事濟む迄名所を、一々に書き留めよ。こりや遣手め、重ねての詮議には、水をくれる用心せよ」と、おどして立共おぢもせず。みや「エイをかんせ。銀くれる遣手に、水くれるとは惡ごうな」と、笑ひを機に云ひしらけ、先を拂ひて立歸る。權威を見せて突鳴す、鐵棒のをと、三味線に、引かはりたる三筋町、戀の市場と三重なまめかし。名古屋山三春平は、通ひ馴にし六條の、道には石が幾個有迄、よみ覺えたる一貫町の、茶屋が茂賀のよしやよし、里になげうつ命ぞと、大門口の與右衞門も、門番には二代の後胤

かい―妓
あつる―つまる
もてあつかひ―もてあます
籠屋―牢屋の事
ぜをくれる―水賃
憇ごう―わる洒落
二代の後胤―二代目の門番を平

家の相武天皇九代の後胤云々の句にもどき、平は碁平

まんぎ―せんぎといふより口拍子にて綴けいふ、工面十面の類

平の供して口輕く、舞鶴屋にぞ入にける。亭主傳三を始とし、數多の女郎遣手迄、「是は是は樣子はお聞なされふが、先四五日も御出なされぬがよいはづ。日比意趣有伴左衛門、切手は名古屋山三じやと、何處ともなしの取沙汰。葛城樣のお案じ我ら夫婦の氣遣、此おみやが辯舌で、今日はずらりとやりましたが、伴左衛門が死骸を奈良漬にして後日の詮議、殊にお客の名所書きしるせとのいひ付。お身に覺えがなふてから、詮議まんぎも喧しし。お前を外樣へつくばはせて、此傳三が立ませぬ。帳面に留ぬ間に先お歸り」と云ひければ、山「いや傳三そふでない。お手前こそ念比、廓中の女郎衆へ苦勞をかけた此山三が、穿鑿にあふ悲しや、と屈んでゐる程ならば、里通ひも妓交りも、あたまからせぬがよし。先和國樣から御禮申ス大事の遣手をお貸しなされ忝い。扨みやの働き心ざし、詞の禮はいふ程古い。三千石とつた山三が手をついて頭を下る、額に千石兩の手に二千石、主人の外一生に、此式作法はみや一人。是が禮ぞ」と手をつけば、みや「アヽ勿躰ないなんのお禮が入ませふ。ちよつと葛樣に逢はせて去なせましたい物じやが、私が行けば目に立、和國樣一篝進ぜて下さんせ」和「いや文もいかどじや、私らが直に誘ふて、遊に出る貌で連れまして來ませふ。サア皆ござんせ」と、座敷をこそは立にけれ。傳「然

らば爰は人もくる。二階へお通りなされ」といへば、当「ヤレ何が怖ふて隠れふぞ。伴左衛門を切たるは誰とか思ふ、此山三が手にかけ打つて捨てたるぞ。葛城が意趣は僅のこと、彼めと傍輩たりし時、狩野ノ四郎二郎を身が取持にて、奉公に出せし所に、伴左衛門親子雲谷と云ふ繪師を引、御在京のお供の留守、無實を云かけ刄傷に及び、四郎二郎は行方しれず。あまつさへ外戚腹の姫君銀杏の前、四郎二郎に心をかけ、御祝言有筈を妨入て狼藉し、某迄も讒奏し、牢人の身と成たれば重々の遺恨有。殊に四郎二郎は隠れもなき名筆、大内繪所の官にも進む身を、某しゐて國に留め、難義をかけて見て居られず。姫君と夫婦になし、四郎二郎さへ出世すれば、本望々々。生けて置ば四郎二郎に如何成仇をかなすべきと、傾城の意趣を幸に、討て捨たる伴左衛門、知れて切腹する計。四郎二郎故に捨てん命、聊か惜いと思ふにこそ。武家に生れた不肖には、大門口で立腹切り、新造衆や禿共、芝居でするよなことして見せふ。ヤア葛城はどふじやの。亭主謠へ」と三味線の、天柱に貌をすぢかひ身、糸の音色も目の色も、人をきつたる躰はなく、亭主結句色違へ、「先お咄はいらぬ物、内外の者共必ずあだ口聞くまいぞ」と、わな〳〵慄ひ手酌にて、減多に呑んでぞ居たりける。みやも聞より驚きて、「扨は我二世迄と、思ひ

不肖―肉果
音色―山三の詞つき
減多―連りに

込うだる四郎二郎様に、斯く迄深き恩を見せ、お命をも捨てんとは、アヽ賴もしや忝や。我こそと名乘て一禮いはふか。いや〳〵姫君とやらへ聞へては、御祝言の邪魔ぞと遠ざけらるゝは知れたこと。只餘所ながら彼のお方の爲に成、お命を助けるこそ我夫への奉公」と、思ひ定て「是傳三さま、お侍の覺悟の上を、女子の了簡推參なことながらあのさんに腹きらせ、恩を受た四郎二郎、いづくの浦で聞付ても、よもや生ては居られまい。人の所緣はしれぬ物、どれからどれへどふつつて、誰が悲みとならふやら。山三樣のお身の難、脫るゝ工面は有まいか。思案は今でござるぞや」と、よそをいふのも夫のこと、案じて餘る涙の色、胸撫でおろすも道理なり。傳「ヲヽわが身がいふ通り、おつ取て廊の迷惑、お仕置には法が有ル。腹切たいとおつしやつても、よふあたゝかに、見苦しい罪に粟田口、下からどふも量られぬ」と云へば、山三はつとして、「アヽウよい所へ氣が付イた。三味線所でないはいの。相手は主持こちは牢人、あばれ者にしなされ、木兎の留つた樣に、獄門などに曝されては、先祖一家の恥辱、今さつぱりと腹切ても、其段からは死骸迄、彌〳〵恥は重う成、エヽ主持たぬ身の無念さよ」と、齒切をしてぞ涙ぐむ。みやは聞程我男の、身に逼りくる悲さの、「どふぞよい分別して、進ぜて下され賴

どうつつて―どう願いて
わが身―汝
粟田口―仕置場
遂はうにかく下から云々―下の者は上の人の心計られぬもの、此諺狂言未廣にもあり

はだを合せ—同心

とつと跡の月—づつと前の月

も腰の物云々—刀は武士の魂、夫を放せとはいはれぬ

鮫—雨やさめに掛く

みます一と、身に引かけて歎く體。亭主暫らく思案し、「是々よい仕様有、爰へよりや」と、小聲に成、「是をついでに葛城様を、とんと請出し奥様に、定める時に親方とはだを合せ、手形の日付をとつと跡の月にして、外様へは借宅見たての其間、廓に少し逗留分。すれば疾から御夫婦と云ものよ。昨日迄伴左衛門がくどひた狀文、握つてからは間男の證據慥なり。女敵討は天下のおゆるし、千人切りても切徳。此分別はどふ有ふ」みやは悦び、「ヲヽできたく、目出度いく智恵者め」と、煽ぎ立れば、傳「アヽむしやうに目出度がるまい。當分請出すお銀がない。もしお腰の物をそれ迄の質物に遣はされば、私が加判で大夫様をたつた今、門を出して見せませふが、お侍にお腰の物とは、なふおみや、どふも申かねるはいの」みや「ハテおのしのお身計か、不便になさるゝ四郎二郎迄、命を助かることなれば、御了簡あそばしませ」と、手を合せるやら歎くやら、山三も共に涙をうかめ、「ヲヽく何が扨く、皆の衆に苦勞をさせ、何しに否と云はふぞ、近比過分千萬。コレ是は重代の左文字、二千五百貫の折紙有。惜しとは思はね共、七才の時より今日迄、ついに脇指一本で、他所に居たこと知らぬ身が、刀の冥加に盡きたか」と、涙は雨や鮫鞘の、脇指計で奥に入、後姿を見おくりて、みや「おいとしやく、傳三様どふぞ

首尾してくださんせ。まきぞへが要るならば、私が繻子の帶も有、八丈の袷もござんす」と、歎けばともに泣聲の、尊「ヲヽ、奇特によふいやつた。おれも男じや氣遣すな。女房を惣嫁に賣つてなりと、埒を明けぬといふ事は、ない」て出るぞ賴もしき。みやが憂身のうき思ひ、口でいはねば氣につかへ、目に流るゝは百分一、胸に涙のとどこほり、山三樣に骨折るも、男の心の悲みを、思ひやり手となつたるも、のらぞんざいで成れふか。戀がこふじて遠山が、此躰になつたとは、知らぬか聞ぬか男めが、何處に居るやら死んだやら、梨も礫もうつとりと、煙草飲んでも、煙管より、喉がとおらぬ薄煙り、人の見ぬ間に思ふ程、泣くを所在か味氣なや。內を首尾して葛城は、走つて來るより駈上り、「みや殿爰にか、いかひ世話であつたげな。忝ないぞや。土になつても忘れはしませぬ、おれが心を察してたも。ほんに〳〵物日なかに痩たはいな。こなたは今は何の苦もなふて樂であろ。遣手の身は浦山しい。山樣は奥にかの、ちよつと逢ふて來ふぞや。後に後に」と云ひ捨てゝ、行を見るにも猶涙、みや「つらいぞ憂ぞといふ中にも、男を傍へ引つけては、憂を凌ぐも力が有。此身には苦も有まいとや。明暮つきあふ人目にさへ、樂な樣に見へるもの、遠國隔てた男氣に、思ひやりのないことは、無理ともいはれず去

まきぞへ―附帶
ないて―無いと泣くとかく
のらぞんざい―粗略
うつとり―茫然、礫も打たぬにかく
煙草のんでも云云―煙草は烟が通つても喉へは通らぬ、此句高尾ざんげの長唄にあり
所在―泣くが仕事
物日―祝日

とては、切て有所が聞きたい」と、聲をたてねばないじやくり、氣も沈み入る時しもあれ、心細げな鼓弓の聲、あはれ催す相の山「我れに涙を添へよとや、夕朝の鐘の聲、寂滅爲樂と響け共、聞て驚く人もなし」みや「通りや。只の時さへ相の山、聞ば哀で涙が溢れる。悲しめて成らぬどうぶくらに、あだ聞ともない通りやゝ」と、いひて涙を押拭ふ。相ノ山「野邊より彼方の友とては、血脈一つに數珠一連、これが冥土の友となる」みや「アしたたるい手の隙がない。通りやゝ」といふ聲に、心に苦のない新造禿、ばらゝと走り出、「こちら好じや相の山、聞て泣きたい所望々々」と立かゝる。みや「エ、意地のわるい子共じや。それ程何が泣たいこと。やつて去そ」と巾著の、紐を解いて取り出す、錢は一錢二世の緣、切れてもきれぬ笠の中、泣沈みたる顏見れば、戀し床しの四郎二郎、互ひに「ハア、ハア、」とばかりに、目くれ心はしみゝと、抱付たふもあたりには、禿が目元小ざかしく、堪へるだけと包め共、咽びふろびぶくたり。みや「アヽ去せましたらよい物か。まちつと哀な心を、謠ふて聞せてくださんせ」元「あつ」と涙にするさゝら、皷弓の弦も細き聲 相ノ山「定めなき世に捨られて、身の寂滅が知らせたく、文は書け共、便りなし。獨寢覺の友とては夢に見た夜の面影か。是が寢ざめの友となる」折しも二階奥

どうぶくら―眞最中

相ノ山―伊勢の相の山にて唄ひ出でし一種の歌曲、したたるい云々―しつこい、物やる隙ない行けと也

ふくろびー包みきれぬ

定めなき云々―前の相の山の作りかへ

座敷、「こいよ〳〵」と手をたよく。「あい〳〵あい」と禿共、立つ間遲しと走りより。みや「是こふしたこともあらふかと、憂命をも捨てなんだ。よふ顏見せてくだんせ」と、紐ければ男も抱き締め、涙の外は聲もなし。みや「なふ戀しいの懷しいのとは、大抵戀路の慣ひぞや。それをとんと打越して、主親方にも背きし故、奈良伏見迄賣り渡され、今此京で遣手となり、花の都も我身には鬼界が島に住む心。胼凍瘡に苦しみても、手足の苦勞は成もせふ。心を痛める計じやない、力業にも才覺にも、かなはぬ物は逢ひたい、と思ふて遣瀨がなかつた」と、あまへ口說ぞ不便成。四郎二郎も盡きせぬ涙、元「ヲヽ道理々々い」とをしや。たび〳〵文でも云通り、和女の蔭にて大事の繪を書き譽を取、契約違へず身請をせふと、思ふ間に不慮の事共、命が有るといふ計。恩をきた名古屋山三、我ら故の牢人。行先も〳〵、目出度いと云字は書樣も忘れて、今は團扇の繪あしや釜の下繪に露命を擊ぎ、大津でとへば奈良にといふ、難波できけば伏見とやら。是は采女雅樂の介、二人の弟子の介抱で、丸四年目に顏を見て、嬉しいことはどこへやら。おれと云者ないならば、疾によい仕合。前垂鎧はさげまい、と親御の事まで思はれて、生た心はせぬぞ」とて、男泣に泣ければ、みや「ナウ左樣打明けてくだんすが、ほん〳〵の御眞實。私はい

蹇屋釜―元信の下繪にて松竹梅を鏤出したる釜

前垂云々―赤前垂や巾著の鍵

つそ親のこと、思ふ所へいかなんだ。私に罰が當らずば、當る者は有まい」と、口說立れば四郎二郎、二人の弟子もとも涙さよらの竹も古の、紫竹にそむる計なり。稍有て四郎二郎、「先いふべきは、名古屋山三春平、此所にて不破ノ伴左衞門を討て、詮議に遇ふ由洛中の是沙汰。遺恨のもとは某故、聞捨てをかれぬ挨拶。廓の說はどふぞ」といへば、みや「さればいなァ、詳しいことも聞ました。山三樣にする世話は、こなさんへの奉公と、さま〳〵心を碎いて、何の波風ない樣に、十の物が九ツ追付埒が明筈で、あれ奥にじやはいなァ」山「是は大慶先通つて對面せふ」みや「イヤ〳〵待たんせそりやならぬ。こな樣を尋出し、姫君と夫婦にせねば侍がすたる、と今も今云ふた人に逢ずといんでくださんせ」元「エヽ愚痴なこと計、我故に一命を果さふといふ、山三じやないか。逢ずに歸つて人外の名をとれか、げしう逢はせまいなれば、爰で腹を切らふか」と、脇指に手をかくる。みや「ハテ死なんせではないはいの、外に奥樣持つまいと、いふ誓文立てあはんせ」元「ヲヽ姫君は扨置、たとへ餅屋のお福でも山姥と祝言するとても、山三が詞を一たん立てずにおかれふか。エヽ世間見た樣にもない、氣が狹いぞや」と恥しむる。みや「世間は唐土迄しつても、氣は武藏野程廣ふても、大事の男を人には添はさぬ。

今も今云々ー只今云うた其人なれば逢はずに賴むと也げしうー是非とも

餅屋云々ー餅屋の馬の看板にもた福の而を着ける事當時の習はし（用捨箱）

息才―息災

聞きたい迄―迄は例の助辭

山三様にあふて四郎二郎が女房は、此みやでござんす、と罷出て斷らふ」元「ヲヽ、云ひたくば云や詞の中に脇指を、此腹へ突きこむ。サアどふぞ〳〵」と詰られて、泣より外は何をいふも大切さ。みや「そんならいふまい息才でるてくだんせ。去ながらどふぞ言拔らるゝなら、言拔て見てくだんせ」と、まだぐど〳〵の忍び泣。元「尤々男のつら役。斯ふいふとてなんの如在が有物ぞ。弟子衆こちへ」と涙ながら、奥へ行間も惜まれて、みや「是采女さま雅樂さま、祝言の咄が出たら云ひ消して下さんせ」と、賴む返事の否應は、涙に紛らし入にけり。心許なさあぶなさに、心騷きて落著かず、襖の際にさし足し、立聞すれば伴左衞門を討とめた物語。みや「アヽ嬉しや女房事は出ぬそふな。最ちつと聞ふ。あの耳語はなんじやしらぬ。聞きたい迄」と耳をよせ、「アヽ悲や、連て歸つて姫君と、女夫にせふといひくさる。こちの男が利口そうに、こなたの詞は背きませぬ」と、叶しづらは何事じや。エヽ聞まい物を腹の立」と、耳をふさいつ立つ居つ、身をもみ歎くぞ哀なる。舞鶴屋の傳三郎遣手引舟下男、いきりきつて大聲あげ、「こりやく〳〵、葛城樣の身請さらりつと埒明た。あとの三月二日に際をやるとの一札、王樣の御綸旨より高直な物握つた。乘物の戸をぐはらりと明て、今でも大門お出なされ」と喚く聲に、人々悅び

主持たぬ云々―浪人の身は是が何より結構

見廻や―見舞へや

投首―憂に沈む様子

乘物古ひ―乘物で出るは昔の事となり

走り出、当ア丶〳〵お手がら〳〵。酒呑童子の首より取にくいこと、主もたぬ身は爰が過分。手を引あふて門を出て、名古屋山三と葛城と、後々迄の咄を殘さふ。ヤア亭主近付になつて置きや。狩野ノ四郎二郎元信廻り逢ふ計に、互ひの苦勞は知る通、身は葛城を請出だす、四郎二郎は大名の、お姫樣をほり出す。祝言の夜は勝手へ見廻や。扨みやの禮は今は申さぬ。前垂鎰を捨てさせ、武家か公家か町人か、望み次第に數ならね共、拙者が親分、先づ姫君の祝言には、待女郎に賴もふ」と、勇みかけても投首に、目も泣はらして返事もせず。堪へ兼てつゝと出で、云はんとするを四郎二郎、柄に手をかけ腹をさすれば手を合せ、泣く〳〵退れどなほ堪られず、思ひきつていはんとす。四郎二郎胸おしあけ、既にかふよと見せかくる。みや「ア丶〳〵申四郎二郎樣、私やなんにも申ませぬ。御息才で姫君と、夫婦になつて下さんせ」と、わつと叫び伏しければ、共にせきくる四郎二郎、「ヲ、よい合點〳〵。廓の衆は涙もろく、目出度いことにも泣たがる。身請する女郎衆に名殘惜いは尤ながら、他國へ行ず死はせず。追付逢ふ泣やるな」と、外にいふさへ包みかね、目はうろ〳〵となりにけり。傳「サア お乘物が參つた。早ふお出なされませ」馬「いや〳〵乘物古ひ」と立出れば、一家の大夫天神圍、「葛城樣さらばや」馬「去

らばでござんす」舅門迄送れ」跡賑かし、打たり舞たり舞鶴屋「傳三が萬うけこんだ。おきみやげを遣手衆、お春お夏」と勇めども、みやが心はあきがらの、腰の巾著ぶらぶらと、物寂しげにぞ三重見へにけり。花の三月はや過て、娘の年も廿悼。いつのまにかは長持に、桐の葉茂るよめり月、銀杏の前の御祝言、名古屋山三のはからひにて、四郎二郎元信を、北野の社人にかり座敷。名古屋が家の子世繼瀬兵衛與添にて、供女中の出立や、地黑地淺黃紅ひわだ、右近の馬場にぞ著給ふ。並木の櫻くれかゝり、まだ人貌も白無垢著たる、若き女の横合より、嫁入の供先押わり〳〵、打も敲くも事共せず、しつかと縋つて引程に、乘物の戸は碎けて放れ、姫君あつと叫び給ふを、胸ぐら摑んで引ずり出し、土堤に押つけ引すゑたり。瀬兵衛刀の反を打、六尺徒士衆おつ取廻し、「そこを放せ放さずは、打殺せ捻殺せ」と口々に呼はれば、姫君制して「アヽ默つて居や構やるな。嫁入する身に女のざいで、只のこととは思はぬ。四郎二郎殿の妾か、但時の戯ふれに、末では妻にせふなどと、男の當座まに合を、一筋な心から其恨みであらふの。我が身にしらぬことながら、殿を持つ役なれば聞まいとはいはぬ。道理さへ立ことで、負る道なら負もせふ。又筋もない道云つて見や。我にも手も有足も有。銀杏の前が理不盡と

國—天神の次の職
心はあきがら—心と巾著のあきに秋をかく
悼—年の數と長持の數
桐の葉—家紋
白無垢—死装束知れぬにかく
六尺—籠舁の事
女のざい—女の分際

陸路―道筋

頭のかゝり云々―いひ出す手がかりがない

西所云々―火葬地、みやの亡靈を仄めかす

修羅出立―死装束

たしなみ―嗜み

いはれては大人氣ない。相手むかひにしておきや。サアなんぞ聞ふ」と、口は陸路をわけながら、胸はしどろの山坂や、顏は躑躅のごとくなり。女溜息顏をあげ、「アヽ流石でござんすな。其美しい出やうには、こふ取た腕倉を放し樣に困つた。我とても中々狼藉する氣は微塵もなく、お乘物に縋つて歎きを申、お情をうけふと、七本松から跡先に、是迄窺がひ參りしが、あたまのかゝりが如何もなく、思はず慮外致せしなり。仰々しい白無垢著たは、討果してのなんのといふ、おどしでも見せでもない。思ふ願ひが叶はずは、西所川原か舟岡へ、直に飛ばふと思ふ氣で、私が爲の修羅出立、高いも低いも女子には、大なれ小なれ此氣はあれど、いはぬで持た世の中。色に出さぬをたしなみと、心で心を叱つて見ても、いかなる慾もはなれふが、男によくは得離れぬ。去りとてはきたない氣、恥かしゆござる」と、聲をあげ譯をもいはず泣ゐたり。瀨兵衞を始め女房、「御祝言の時刻ちがふ。道行計いはず共、要ること計申せ〳〵」と責ければ、みや「ヲヽ御尤御尤。私は土佐の將監が娘、稚名はお光、親の憂瀨に身を賣り、越前の敦賀で遠山と申せし流れの者。四郎二郎殿とは故有て、起請一筆書ね共、釘かすがいより離れぬ中。身も持くづし方々をうろたへ、今は六條三筋町、上林が内みやと云、流れの身よりあさまし

はつたり—俄に縁切れる

笑止—氣の毒　いやと云々—否というてはなり

かけご—中證、心の底をいふ

飛梅の神—天滿天神

い、遣手はしてもをのれやれ、一度は狩野ノ元信が、内義といはれふ〳〵と、四年が間の氣の張弓、はつたりと弦きれて、泣くにも力あらばこそ、無理ともそんとも餘り無法なことながら、永うはいらぬ一七日、今宵の嫁入を下されば、跡はお前と萬々年、七日添ふて別れて後は此世の生顔見せまいし、たとへ死んでも彼の人の、未來の廻向は受ますまい。最ふ此跡は申ませぬ」と、涙を流し手を合せ、伏轉ぶこそ哀なれ。姫君呆れておはせしが、「聞けば笑止悼はしや。いやと云はたいてい胴慾者といはれふず。心得たといふてから迷惑するは我一人。新枕はどふこうときほひかょつて行嫁入、道から貸して歸るとは、咄にも聞ぬこと。こちや義理ずくめになつたか」と、聲を上て泣給ふ、道理のうへの道理なり。やょ有て涙をおさへ、「ムゝよし〳〵合點した。和女が其思ひからは男も心にかょる筈。二人の縁の離れぬ中へ嫁入しておかしうない、蓋もかけごも打明けたこそ女夫なれ。男を貸してやる程に、互ひの心を晴らしてたも。去ながら、餘りかけごを明け過し、底抜きやつたらこちや聞ぬ」と、涙ながらにの給へば、「ァゝ有がたや」と遠山は、姫の膝にいだき付、遣貸すお心より偖る心、御推量遊ばせ」と、泣聲よそに飛梅の、神も憐み給ふべし。姫「サァ迚もなら早いがよし。元信はかねてより、傾城好と

聞きし故、此小袖を見や、廓模様に云ひ付た。是著ていきや」と裲襠脱いで、「七日といふもいま〳〵し。來月一ぱい貸すぞや」遣ア、お志は有がたけれど、終に別るゝ此身なり。然らは七々四十九日が中は私が妻と思しめせ、此分で死んだらば、定めて男の餓鬼道へ墮ちませふ」と、泣く〳〵たてば姫君、「さふいふて皆吸ひ乾しやんな。どこぞ少は殘してたも。こちは是から腰本つれて歩ふて戻る、あの乘物で皆供しや」と、歸るさを見て遠山は、「姫君樣の情程、我身の罪は重うなる。借る時の地藏菩薩に捨てられ、返す時の閻魔の廳、どふ云て脱れふ」と、涙をかこふ神垣や、神も佛も見どほしに、酸も甘いも梅青む、北野の假屋に三重嫁取の、嫁の手道具、御厨子鏡臺うちみだれ箱、葛籠貝桶挾箱、長刀持せて遣手のみやが、來るとは思ひがけもなし。其心底の屆きしこと、姫君の情といひ、かた〴〵默止がたければ、門弟雅樂之介、采女隼人大學なんど宗徒の弟子共、すべよくまかなひ春平にも内意を得、表向は銀杏の前御入有しと披露すれば、方方の音物樽よ肴よ卷物よ。太刀折紙の馬代銀、五十目がけの蠟燭の、明ぬ暮ぬと賑ひて今日五日目の麻上下、雜煮の黑餅子持筋、つき〳〵しくぞ見へにける。其日もやう〳〵傾ぶく比、名古屋山三春平「お見廻申と案内有ル。雅樂介出むかひ、「先以て此度は姫君

妻―夫の事、原本夫妻とも皆妻の字を用ふ

借る時云々―借る時の地藏菩薩なす時の閻魔顏の謎を利かす

かこふ―包む

貝桶―目録の貝を入るゝ桶

黑餅―黑丸の家紋

子持筋―嫁聚の時著物に大小の筋を入れるが例

（俗訓栞）つきづきしし似合ふ了簡云々―奇麗にみやの頼みを容るゝ心

樣了簡うつくしく、おみやも念晴れ元信心も落ち付き申こと、皆是貴公の御蔭門弟中も忝く、悅び存候」と、何れも禮をなしにける。当「是は迷惑元信ためと存ずれば、各同前の大慶。さて今日は五日め五百八十の餅を搗いて、里歸りといふこと、縁邊の式法なれ共親元は遠所、祝ふて我らが宅へ呼びたいと、葛城も申が、ちよつと尋て見たい」とあれば、雅樂の介打笑ひ、「イヤ尋ぬるに及ず。頓て別るゝ日限の女夫、寢いる間も惜いとて、顏と顏を突合せ、頭もふらぬしたゝるさ、里歸りは扨置、臺所へも出られませぬ。夫はぎやうな喰ひつき樣。そふして互ひにあかせたら、跡のためには珍重。元信筆は達者なり、一日一夜に半年の仕事は出來ふ」と笑るゝ。斯る所に無紋の色に淺黃の上下、編笠取て入を見れば、舞鶴屋の傳三郎、出口の與右衞門打しほれたる風情なり。名古屋を始め門弟中與さめて、「是傳三あんまりそれは粹過た。聞ぬといふこと有まい。葬禮の戻りに、祝言の家へ立ち寄るは、無禮すぎた不道化、笑しうない歸れ〳〵」と苦々しく叱られ、鼻打かみて目を擦り〳〵、傳「姫君樣の御祝言と遠慮致して見ましたが、わきから沙汰が有てはお恨みの程もいかゞと、嘸が心を付まして、今日七日目の墓參りついでながらのおしらせ。常々氣だてが結構で、おみやとはいはず佛々と申たに、あつたら佛を

不道化―慇懃過

骨佛―死人をいふ

ひきゝ―贔屓

いとしぼげ―いとほしの轉

やくたいもない骨佛にしてのけた」と、さめ〴〵とぞ泣ゐたり。人々更に誠とせず、「酒に醉ふたか狂氣か。みやは少樣子有て、姫君に替り四郎二郎と祝言し、五日前より奥に夫婦ならんでじや。たはけたこと吐すまい」傳「イヤ私をたはけになさるゝか。七日前に死んだ人が、五日前に來るものか。蓮臺寺專譽樣の御引導、舟岡山で灰になし、和國樣をはじめ、女郎衆から名代に、禿共が灰寄せ、五輪迄立てたもの、なんの僞り申ませふ」と、眞顏にいへば人々も、ぞつと怖氣も立ち寄りて、「して眞實か。どふして死なれたことぞ」といへば、傳「眞實かとはぢとしぼげに。常が癪持ぶら〳〵とはしながら、一日と寢られたこともない人が、いつぞや葛城樣身請の晩から、頭痛するとて引こんでそれから枕上らず、次第に重つてくる程に、お客衆のひきゝで、柳原の法印さま、半井の御典藥、幸と和國樣へ對馬の客から參つた朝鮮人參、尾張大根見る樣なを、きざみもせず丸口、人參の風呂吹を一期の見はじめ、人參でも鐵炮でも、いかな咽を通すにこそ。最ふ無いに極つて私を呼びよせ、今迄は隱した遠山といふた昔から、四郎二郎と夫婦の契約し、目出度ふ願ひ叶ふたら、女夫づれで熊野參りを致そふと、願ひをかけ、此笠の紐も手づから結ました。これを著て四郎二郎樣熊野へ參つて下され。死しても心は連れ立

たふ。書置もしたいが、口でさへ盡くされぬ、筆には中々廻らぬ、と目をほつちりとあいて、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と七八へんは聞ました。なふ肝心の時には念佛といふ物も、何んのごくに立ませぬ。南無阿彌さへすう〳〵陀佛迄やらずに、轉りととつていきました」とわつと叫べば人々も、「扨は定よ」と手を打て、皆々袖をぞ絞らるゝ。名古屋も呆れぬられしが、「疑ひもなく夫にひかるゝ魂魄、假に形を見せけるぞや。さもあれ樣子を尋る爲、腰本衆〳〵」と呼びければ、壓「あい」と答へて奥より出る。山「なんとおみやは機嫌はよいか」と問ひければ、壓「アヽ機嫌よふにこ〳〵笑ふてござんする。去ながら志有とて酒も魚も口へよせず。樒の香の煙り絶やすな。煙絶ゆれば爰にゐることならぬとて、おねまの内は抹香で、ふすぼります」といひければ、山「して四郎二郎はどふしてぞ」壓「アヽさればおみや樣の賴みで、お寢間の襖に熊野山の繪をあそばひてござんする」山「扨はみやの幽靈疑ふ所もない」とあれば、腰本驚き「アヽ怖や。なふ知らひで傍に居ました」と、膝の傍に這ひ寄りて、身を屈むこそ道理なれ。雅樂の介心を決せんと思ひ、「さもあれ狸野干の業も有。誠の死したる幻は形あれ共、影映らず」と承る。某參り直に逢ふて笠を渡し、灯火をたて實否を試し申べし。かた〴〵は小庭より障子

ごくに立ぬ―閒に逢はぬ（俚言集覽）

野干―狐

藪蚊の云々―血吸うた蚊の集りて上下するを餅搗に譬ふ　前垂　着けて臼どりする衣紋けたり

物ごし―詞つきらう〳〵―勞の字を宛つ

牛王―熊野牛王の事、天の網島にあり

の影を御覽あれ。假令怪しいこと有共、必わつといふまいぞ」「何が恐いこと有」と誰も口では夕暮や、小氣味のわるき籬が本、軒に藪蚊の餅つきも其前垂の名殘かと、心細くも佇ずめり。雅樂の介何心なき調子にて、「是は暗いお座敷。みや樣はそれにか。火を灯したらよふござらふ」と云ふ聲す。みや「ア、さればいな、心の迷ふた身の上、闇に闇を重ぬるつらさ、晴らして欲しや」と夕顏の、黃昏照らす行燈の、障子に映るを能く見れば、元信は元の人躰にて、女の影は五輪とみやが物ごし計。人間の地水火風の風脆き、木の葉に結ぶ陽炎の、露の姿ぞ哀成。四郎二郎はらう〳〵と疲れ詫びたるごとくなり。雅樂の介猶訝しく「此菅笠は里の便に參りしが、何に要ことぞ」といへば、みや「なふ嬉しや〳〵。ほんに是が欲かつた。私が熊野を信ずる事、敦賀では遠山三國での名は勝山伏見へ賣られて淺香山、山と云字を三度つき、それ故に木辻では三ッ山と付られし。思へば熊野三ッのお山の名を穢し、牛王の咎めも恐ろしく、お主と一所にして下さらば、連れだちお禮に詣でませふと、笠の紐迄絆おきし。追付別るゝ身なれども、一日でも斯ふ添ふからは、願は叶ふた同前。神佛に嘘はないと、此襖戸にお山の繪圖を賴みまし、參つた心で拜まんと、思ふ所へこの笠は、どふした便に來たことぞ。餘のことは何もいは

ずか。又の便に傳三殿へ、假令いかなること有共、四郎二郎樣へ歎きの懸る事などは、知らせまして下さんすな、とよふ云ひ屆けてくださんせ」と、苦の下まで我夫、悼はる心ぞ不便なる。みや「サア女夫連で參りませふ。此方さまは勝手へ行て、後夜の鐘の鳴る迄、念佛きらして下さんすな。似合たか知らぬ」と、笠打被たる五輪の影、五ッの假の夢現。餘所のことではなく〳〵も、元の座敷へ人々は、宗旨々々の手向草、題目眞言念佛の、廻向に更るも三萬、

髮にたいたり―伽羅沈香を髮に焚きこむ　反魂香―漢の武帝方士をして李夫人を出さしめし香此所を表題としたるなり　順をいふなり―みやの詞元信樣が死んで妾が後

三熊野かげろふ姿

歌あら惜やあたら夜や、夫婦のなかに咲く花も、一夜の夢の眺めとは、知らぬ男の悼はしやと、泣くより外のことはなし。昔の朝の身じまひに、髮にたいたり裾にとめ、そよとふくさの色風も、今燒香に立つ煙、反魂香と燻ゆるかや。香爐の灰の灰寄せも、順をいふなら此方さんを、われこそあらめ逆さまの、水の流れの身のならひ、ところ〴〵の死水を、誰にとられんあさましと、よそにいひなす言の葉を、世に亡き人とはそもしらず、ア、いま〳〵し、老木の末の思ひ置はよしなやな。こちもそなたも若松の、歎「千代

甲ふが順當なるに之は逆なりとなり　老木云々—老後の言置は詰らぬ　三途—滿つに掛く

熊野—苦にかく　照手—夫小栗判官を慕うて宿屋の下女となりし話、常陸小栗は其時の假名はしに云々—夫小栗が癩病になつて端に居るも知らず　土車—之に小栗をのせて姿樣は湯元—熊野の湯和歌浦—若にかかう〳〵—神々しいと鳴る音にかく

の盃ざょんざ濱松のをと、七ほん松の七本を、女は卒塔婆に數ふれど、男は今日の七五三、嫁入ごとせし戯れも、今は誠と嬉しげに、手を引あふて笑ひ顔、我は朝顔しぼみゆく、花のうへなる、露とはしらぬ果敢なさよ。月は缺けてもみつの山、娑婆の便は片便宜、文も屆かず言傳も、いはで心の熊野路や、照手の姫のやつれぐさ、常陸小はぎもおつと故、身を旅籠屋の水だなの、はしに目鼻の癩病を、つまとは更に白糸の、緣はきたなきつち車。心は物に狂はねど、姿を物にくるはせて、ひけや〳〵此車、ゑいさらさら〳〵笹の葉に、死出の旅路の後世の友、一ひきひけば千僧供養、二ひきひけば萬能の、藥の湯元と聞からに、四百四病は消へもせん。骨になつても癒らぬは、私がそ樣を戀やまひ、變る心を案じては、神の御名さへぞつとする。飛鳥の社濱の宮、王子々々〳〵は九十九所、百に成ても、思ひなき世は和歌の浦、梢にかゝる藤代や、岩代峠汐見坂、靈き寫す繪は殘る共、我は殘らぬ身と聞ば、いとしやさこそ我つまの、涙にくれて筆捨松の、雫は袖にみつ汐の、新宮の宮居かう〳〵と、出島によする磯の浪、岸打波は補陀落や、那智は千手觀世音、古へ花山の法皇の、后の別れを戀慕ひ、十善の御身をすて、高野西國熊野へ三度、後生前生の宿願かけて、發心門に入人は、神や受くらん御本社の、誠

十二社―十二因縁をよせたり　流の罪―遊女の時の罪を地獄の業の秤にかければ磐石却て輕し　垂跡和光―佛の神と現じて此土に跡を垂れ玉ふ

つくましし―恥かし

證殿の階を、おりて下りて待うけ悅び給ふとかや。我はいか成罪業の、其因緣の十二社を、廻り輪廻を離れねば、疑ひ深き音無河、流れのつみをかけて見る、業の秤のおもりには、それさへ輕き磐石の、岩田川にぞ著けける。垂跡和光の方便にや、名所々々宮立迄、顯はれ動き見へければ　元信信心肝に染み、我畫く筆共思はれず、目をふさぎ、「南無日本第一大靈驗、三所權現」と伏し拜み、頭をあげて目を開けば南無三寶、先に立たる我妻は、眞逆樣に天を蹈み、兩手を運んで歩み行。はつと驚き、元「これなふ淺ましの姿やな。誠や人の物語、死したる人の熊野詣では、或ひは逆樣後向、生たる人には變ると聞。立居に付て、宵より心に懸ること有しが、扨は和女は死んだか」と、こほし初めたる涙より、盡きぬ歎と成けり。みや「恥かしや心には、陸地を歩むと思へ共、逆に見へけるかや。四十九日が其中は、婆婆の緣にむすぼほれ、姿を見せて契りし物を妹脊の中に怖氣立、愛想も盡きばいかゞせん。變る姿のつょましや。逢ひ見る事も是限り」と、泣く聲計身を絞る、涙の霧や戀慕の霞、冥々朦々朧々として、見へつ隱れつ灯火の、油煙に紛れ失せにけり。元信五躰をかつぱと投げ、「よし、雨露に朽果てし、骸骨なり共抱き留め、肌身に添へん夫婦の友、何に恐氣の有べきぞ。現世の逢瀨かなはずは、刃に死し

て此世を去り、極樂諸天はおろかのこと、假令へ地獄の底迄も、誘へ伴へ連立て」と、座敷のくまぐ〳〵屏風押退け、障子を開き、「やれ遠山は何處にぞ。みやはいづくに我妻」戸、明る遣戸に遣手の形、現はれ見へしぞ哀なる。亡魂「いつならはしの世渡りや、阿波の鳴門は超るとも、此浮舟の浮き流れ、何と遣手の身ぞつらき。まぶの忍び路關となり、文の通ひのさかも木に、人の思ひは戒しめながら、我身は包む戀衣、赤前垂の火焔に焦れ、三途八難の惡趣に墮す、苦みの涙目を眩まし、生死を分ぬ迷ひの雲、所々に名を變へて、かず〳〵色を飾りし報ひ、身躰一つが五つに分れ、五輪五行の苦をうくる。如何成世に か免かれん」と、叫び慄く袂の影、艶色あて成二人の遊女、左右に別れ見へたるぞや。亡「是こそは其はじめ、白粉紅花に粧ひし、後世の道には遠山が、あだの情の釣針に、人を敦賀のうき姿、松といはれし松が枝は、四大のもとの木に歸るなり」「次は三國へ買ひ流されて、姉女郎や傍輩に、賣り負けまいぞ勝山と、名をかへ風を變へけるも 戀に我をはる我慢の山、麓の塵のちりひぢの、土にかへすを御らんぜ」と、夕月出るごとくにて、後に高くあらはれしは、「流れ漂よふ川竹の、伏見に來ての淺香山、流石所も極樂を、願へと告る撞木町、安養世界の夜見世には、灯すべき灯火なく、吹き消す風も吹ずして、

まぶ—間夫

八難—地獄餓鬼等八つの難（獄氏要覽）

五輪—地水火風空

五行—水火土金水、みゝが五度行をかへたるを五輪にあてゝ以下五人の姿となつて顧はるゝ所注意すべし

敦賀—釣にかく

四大—地水火風

一心の火をもとの火に、返す間の影ぞかし」前に立たる花ずすき、ほのぐ見へしまぼろしは、「木辻の町の三つ山と、呼れし時の面影が、今は名のみに奈良坂や　この手彼の手の枕の酒、霙霰とへだつれど、解ればおなじかすり井の、水をかり成戯ふれも、つひに迷ひのゐせきにからみ、木は執心の斧にくだかれ、土は逢ふ夜の壁とへだたり、火は又三世の縁を燒く。四大の四苦を此身一つに重ね、重ねて空より出て空に入、報も罪も色も情も、迷ふも悟るも待夜の鐘も、別れの烏のこゑぐ迄も、地水火風の五ツの玉の緒、只一筋に結びあひたる姿成ぞや。なふ〳〵、惜みても猶惜まるよ　名殘も緣もついに行、道ならばいざ伴なはん。とは思へ共夫の命ながかれと、祈る心もさまぐに、皆妄執のあだ夢と、さめざめもろき涙の露の、玉の臺の床の内、連理の蓮片しきて、永き契りを待つぞや待たん、しるしはこれ此一見卒塔婆永離三惡道、南無や三熊野本地の三尊、迎へ給へや道引給へ」と、唱ふる聲は伏屋に殘つて、形は見へず消へにけり。元信抱き留めんと、すがりつけば影もなく、うんと仰向に目くるめき　忽息切絶へ入しを、名古屋揚屋門弟等驚き騷ぎ、藥さまぐ呼び助け、やう〳〵一間に三重休めけり。夜もほのぐと明行比、官領の雜式、不破の道犬長谷部の雲谷誘引し、伴左衞門が酒漬の

霙霰―酒のもろみにかけて云ふ、雪氷雨や霰と隔つれど落つれは同じ谷川の水（謠庭和尚）
待夜―平家物語の待宵侍從の歌
四大の四苦―生老病死の苦
地水火風云々―四大よりなる五人の命
一見云々―一見卒塔婆永離三惡道（涅槃經）
官領―卒酒

片口の御裁斷―片一方の言のみを聞きたる裁判

死骸を舁せ、どや〳〵と亂れ入、「此所に名古屋山三春平や有。官領よりの御下知有、對面せん」と呼はつたり。名古屋遲々せず出でむかへば、雜式鐵鞭引き鳴らし、「不破伴左衛門をお手前が手にかけしこと紛なき上、父道犬願ひによつて、吟味を遂げらるゝ處、盜賊の罪遁れがたく、曲事に行なはるゝ條、召捕り來れとの御諚、尋常に繩をかゝられよ」とぞ仰ける。名古屋少しも騷がず、懷中より忘八の手形數通の文を取出し、当斯樣の愚蒙の返答は、申も似合ぬことながら、片口の御裁斷如何にしてもかろ〳〵し。是此手形を御覽ぜ。葛城事は三月二日に親方が暇を取、拙者が本妻、借宅見たての間、揚屋に預け置し所、伴左衛門敷通の艶書、斯くの通不義者の妻敵なり。此方より願ひを申、親道犬をも、罪科に沈めんと存ぜし折から、却つて我らを召捕れとは、定てそれは各〳〵の聞違へ、夫成道犬か雲谷が事でがなござらふ。遁げも走りもせぬ男、聞直してお出なされよ」と、大樣にこそ答へけれ。道犬つゝと出、「汚ない〳〵こりや山三、悴伴左衛門葛城を請出す手付として、金子五百兩懷中せり。妻敵討は聞へたが、なぜ金子は盜んだ。惣じて盜みと云物も盜む時はうまいこと、顯れた時は辛い苦い物じやげな。サアなんと脫るゝ所は有まい」と、證據なき云ぶんながら、名古屋も相手は死人なり、何を印の云

苦々敷―人々がにが〳〵しく思ふ

譯と、苦々しくぞ見へにける。四郎二郎斯くと聞より飛んで出、「いや〳〵兎角の評議は御無用、盗人ならば盗人、切取ならば切取、科人は狩野ノ元信、繩は百筋千筋でもおかけなされ」と、大小脱いで投げ出さんとする所を、名古屋押へて「暫らく〳〵、御心底忝い。去ながら、それ迄に及ぬこと。ひらに〳〵」と推留め、当「是道犬、某盗人でない申譯が立ならば、おのれ又侍に盗人といひかけした其科はなんとする」時に雲谷進み出、「イヤサ山三、盗人でない云譯立てば、命を助かる其方が仕合よ。道犬公は一子を殺され金子を取れ、何の過り有べき」と、いはせも果てず　当「ヤアうぬらが存ずる詮議にあらず。お屋形にては一ツ間へさへ入ざりしを忘れたか雲谷、此穿鑿相濟んで、うぬも遁がさぬ用心せよ」と、睨み付れば道犬、「山三々々脇道へすべらすまい。五百兩の金子を身に付た伴左衛門、切りは切たが銀はしらぬと云とても云はせふか。盗人でないならば、云譯せよ」と詰かくる。当「ヲヽサ云譯はして見せん。其跡は合點か」道「イヤ先云譯から聞んず」とせりあへば、「雜式是々名古屋、問答迄もなし其爲の我々。人にこそよれ兩方共に、弓馬の身柄、盗賊といひかけ分明ならぬ訴訟、且は上を掠むる越度。云譯たたば道犬は、存分に計らふべし。又盗賊に極まらば下知の如く、お手前に繩をかけ申」

一ツ間へさへ―身分の低い事

其跡は合點か―其跡の處分は承知か

ござんなれ―こそあるなれの略、てあるを強めて云ふ也

と、理非明かに述べらるゝ。名古屋勇んで罷出、「名古屋山三春平は、外の事は不調法、傾城の買ひ樣と人切る樣は大名人、恐らく宗匠ござんなれ。それ〳〵伴左衞門が死骸を是へ出されよ」「心得たり」と役人共、封切ほどき酒漬の、死骸は更に色變らず、唯其時の如くなり。名古屋袴のそば取てちか〴〵と寄り、「彼を討しは先月廿日、曉月の時、烏、名乘かけしは欺さぬ證據。向ふ疵に切り伏せ、とどめを刺んと乘つかゝり、胸押し開けば懷中に金子有。此儘置いては誠の盜人、來つて搜し取らんは必定。時には山三が盜みしと、後日の難を察せし故、鳩尾先を剜つて、金子は彼奴が身躰の内、肺の臟に押込だり。五臟の中にも肺は金、同氣もとめて朽も錆もよも爲まじ。いで見せん」と、手を伸しぐつと入、朱に染みたる緞子の財布、引ずり出して、当「是見たか。是でも山三が盜人か。弓矢取身の仕方を見よ」と、道犬にはつたと投付、死骸を蹈へつゝ立ば、雜式を始として、元信其外門弟等、「出來たゝ。あつぱれ〳〵御分別、後覺なり」と勇みをなす、道犬は言句も出ず、雲谷はひるまぬ貌、「相手の云譯たつからは、此方は切られ損。お歸りなされ」と立所を、二人の雜式飛びかゝり、鐵棒ふり上打つ程に、面も眉間も打裂れ、胴骨碎くる計なり。頓て繩をかけさせ、「道犬親子は世間流布の重罪、上を犯す科といひ、

後覺―後學にて後進の學問

世間流布―世間に知れ渡れる

只今の始末諸人の見せしめ、親子諸共獄門に曝さるべし。それ〳〵死骸の首を打て」承つて下郎共、搔首にして髪をからげ、道犬が首にかけさせ、「扨雲谷は當座の慮外、罪の輕重いかゞあらん」と有けれ共、元信春平詞をそろへ、元は彼奴が惡逆騷動の始なり。古主の屋形に訴へ、長袖なれば流罪に行なひ申たし」「尤々二人共に籠屋へやれ」と引立れ共脛立ず。「エヽ卑怯者歩まずは、任せて桶にうち入れて生ながらの酒浸し、地獄の鬼の畫食菜」と、戯れ笑ひ歸らるゝ。悅ぶ中にも元信は、憂へに沈む那智の瀧、亂るゝ色を勇めんと、謠へや謠へ雅樂の介、其外の門弟中、憂ひは憂ひ祝義は祝義、末來の嫁人は一七日、現世の嫁は七百町、ながく知行にすみ筆や。家を彩色く繪具筆、隈筆蘂筆泥引筆、その筆先に金銀も、わきて和泉の壺の印、ならびなつ毛の狩野の筆、末世の寶となりにけり。

桶一盥にかく、即ちそのまゝ桶に入れとなり

わきて云々―坪にかけて庭の隅に泉の湧き流るゝをいふ　壺の印―元信の印の形　ならび云々―雙なき鹿の夏毛の狩野の筆　長康云々―顧長康、張僧繇、陸探微

下之卷

凡繪の道には、六ツの法有。長康、張僧、陸探の三人を、異朝の三祖と學びきて、和國に筆の色をます、狩野の四郎二郎元信、天然彩畫の妙手を得て、後柏原、後奈良の

院、正親町の帝、三代四代の聖朝に仕へ、祝髪の後越前ノ法眼、玉川齋永仙と號し、末世の今に至る迄、古法眼と賞歎するは、此元信の筆とかや。既に大永七年新帝、大嘗會悠基主基の御屏風を書、從四位ノ下越前ノ守に補任せられ、數多の門弟上下の供人、肩をいからす山科や、土佐ノ將監光信の山庄に案内せられける。將監夫婦出向ひ、「今官祿に秀で給ふを見るに付、娘が事の忘れがたなふ候」と、詞に先立涙なり。元「仰のごとく、某とても、彼の人を先立、世に交る所存なけれ共、將監殿を世に立んと、惜からぬ世も捨かね申せし所に、次第々々に登庸し、大嘗會の御屏風を仕、叙爵に至る朝恩の上、貴公の勅勘訴訟叶ひ、向後一家の結をなし、相竝んで繪所の門を開くべしとの宣旨を蒙り參りたり。親御達を世にたてなば、草葉の蔭の娘子の、一ッの迷ひも晴るべきかと、かたのごとくに禁中方、願ひ取なし候」と、語り給へば將監夫婦、「有難や忝や。歎きの中の悅びとは、我らが身にて候。貴殿の御ひけいにて勅勘を免さるゝも、一ッは娘が光りぞ」と、なを〳〵落涙せき敢ず。斯る所へ名古屋山三春平、樽肴黃金時服さま〳〵音物持せ、將監に對面有。「雲谷不破が不屈故、元信我等兩人永々沈淪致せし所、善惡の是非落居し、三人の惡黨死罪流罪の嚴科に處せられ、某も先知に復し候。其節は姫君の御事に付、御

大嘗會云々—天皇綱即位の後始て行はるゝ大儀式。悠基主基は、北左右にある祭場

願—敗勘赦免の願

綱ひけい—ゐかげ

先知—元の知行

じぶんさま〳〵御懇志の趣、主人御屋形滿足致され、先當分お禮申さるゝ印目錄の通、微少ながら」と述べければ、聟御使がらと申御丁寧成御事」と、互の禮儀淺からず、暫く時こそ移りけれ。稍有て名古屋、「ヤア承れば娘子遠山、忘八の手前約束の年明て、今是へ歸り候ふよし、さぞ〳〵お悅び推量致した」と、いへ共人々のみこまれず兎角の返答なき所に、供の者共こゑ〳〵に、「遠山樣早やあれ迄見へまする、迎ひにお出なされませ。ありやく〳〵振つてござるは」と、云うても更に心得ず。死して程經る遠山が、歸らん樣は涙ながら、立ち出見やれば屋形の姬君銀杏の前、髮いれずの二ツ櫛、鴨のはなりのはすは袖、供の又平日傘、さしづめ香車は女房なり。いつならはしの道中も、心つければ振りやすい。ふれ〳〵雪の遠山が、御影もよもや、「是爰がおれが内か」とつゝと入、「なふ父樣母樣今歸つたはいな。久しうて逢ひやした」と、とんと座りし居住居は、禿だち見る如くなり。各は不審晴れず、名古屋は元より合點なれば、当ヲヽいづれもの御不審は尤々。ながふ申せば段々あれ共、畢竟姬君を將監殿の娘にして、死したる人が二度蘇生られたと思召し、元信にめあはせあれ。姬君も一度は大事の命を助けられし各々なれば、斯うなふてから親同前。なまなか儀式だてしては、養子というで面白なさ。又

涙―無しにかくさしづめ―さすにかけて當然
香車―遣手の事、吃又平が幇間なれば遣手はその妻なり
ふれ〳〵雪―ふれ〳〵小雪云々の小唄によるもの
斯うなふてから―かうないにしても

取組—此狂言の取組

給所云々—諸人の領地入組みたれば七百町の地割六ケ敷

駒引錢—馬の形を鑄込みたる錢

韓幹—唐の畫人特に馬を畫くに巧なるを以て知られる

平夫婦と談合して、血をわけた遠山に、いたしたが我らが趣向。取組は御屋形の、御意でござる」と小短く、譯も聞へる道もたつ。銀つかふたるしるしなり。將監夫婦も悅び涙、「小さい時のお光が成人顏、見て嬉しい」と抱き付てぞ泣給ふ。名古屋重ねて懷中より一通を取出し、「是は田上郡七百町の御朱印、永代知行なされ」と頂戴させ、「扨田上郡は給所々々の入組にて、地わり中々むつかしし。某が父主計の介、天文の曆算に達し鼠承露盤と云ものを巧み、積物割物人の聲にしたがつて、承露盤の表明白に顯はるゝ。是を以て勘へば、間づもり知行高、刹那に相濟申べし」と有ければ、元信聞給ひ、「それに付延喜の帝、陸平永寶駒引錢を鑄させて、民を賑はし給ふ。其駒は、晉の韓幹が馬を寫されし。我又其駒の圖を傳へ覺えて候へば、駒引錢を鑄て、領内を賑はし申べし」「是は珍重、然らば善は忙が」しや、嫁入婿入國入して、本祝言の儀式は重ねて。先々今宵は祝ふて、ざつと目出度ふ候べく、そろばんつぶに萬代積るぞ 三重豐なる。年は子の年大黑女夫、力次第に子孫も湧出る、地からは五穀手からは金が、湧出々々子々孫々迄、長久榮花の家繁昌は、君が惠みの威德なり。